復讐という名の物語

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
復讐という名の物語

【Ｎコード】
Ｎ６７５０Ｍ

【作者名】
刹那

【あらすじ】
自分を救ってくれた男を探す旅を続けるキリア・ヴァッシュベルン。
その理由は自分の恨みと苦しみをぶつけると言う最悪なものだった。
手がかりを見つけるため立ち寄った大都市でキリアは自分にとって初めての仲間を見つけた。
一人の青年とその仲間が創り出す物語。

プロローグ&第一章（前書き）

下手な小説ですが、気にせず読んでいただけると幸いです。

プロローグ&第一章

誰も居ない。
帰る場所が無くなった。
とてつもない悲しみにキリアは押しつぶされそうになっていた。
全てを失う悲しみは十歳という幼さには重すぎたのだ。
涙も枯れ切ったキリアには何もできず、ただ冷たい地面にへたり込むしかなかった。
そんな全てを失った少年の前に一人の青年が手を差し伸べた。
キリアはゆっくり視線をあげ、整った顔の青年の顔を見る。
「……お兄ちゃん、誰？」
キリアの問いかけに青年は薄い笑みを浮かべ答える。
「まず、お前の名を教えろ」
「キリア…」
「キリアか。いい名前だ」
「お兄ちゃんは……？」
青年は手を引っ込め、目線を同じ高さにするためしゃがみ込む。
「俺の名は……」

――――――――第一章　プロローグ――――――――

雀(すずめ)の鳴き声でキリアは目を覚ました。
樹の根元に背もたれていた体をゆっくり起こし、緑の一面を見渡す。

風により草木は揺れ自然の豊かさが強調される。
(夢か……。あんな昔の……っ)
キリアはそばに置いてあった刀を腰につけ立ち上がる。
そのまま足を踏み出し、樹の陰から抜け出した。
空は快晴で濁った雲などありはしない。
見覚えがある光景……。そうここはキリアとキリアを救った青年が初めて会った場所。
キリアにとっては復讐の対象となっているあの青年との。
キリアは不快な気持ちに犯される。
安らかな風がキリアの黒髪をなで、去っていく。
(なぜ、ここに来てしまったのだろうか……。)
キリアは薄い笑みを浮かべこの先にある大都市ベルフェリングに向かい、足を進める。

――――――――第一章――――――――

いろんな人々が通り過ぎている大通り。
買い物袋を持った母親。
町の警備に当たっている警備兵(ディリング)。
楽しく喋りながら歩く学生達。
仲良く手を繋いで歩く恋人同士。
そんな‘今’を生きている人々の中に流れるようにキリアは歩いていた。
キリアの姿は明らかに異様なので歩く人々は間を空け、歩いていく。
黒のチェーンメイルに黒のマントを羽織り、黒の革ズボンに膝当て、腰に刀。
布で作られた服を着ている一般人にとって、キリアの姿は浮いていたのだ。

だが、キリアはそんな事は気にもせずに歩いていた。
キリアはしばらく歩くと大通りから外れ、ひとつの建物に入った。
中は西部劇にでも出てきそうな酒場みたいなデザインで中年の親父や若い女性、警備兵（ディリング）などで賑わっている。
キリアは中を見渡し、空いていたカウンターを見つけ、そこに腰掛けた。
「いらっしゃい。何飲むんだい？」
カウンターのマスターが注文を聞きにキリアに声をかけた。
だが、そのマスターの質問にキリアは答えずに言った。
「この辺りに、有名な情報屋が居ると聞いてきたんだが……どこか知らないか？」
キリアの質問にマスターは顔をしかめ、しばらく考えた後、顔をニヤつかせながら言った。
「何か注文してそれを飲み干したら教えてやる」
「そうか。なら結構だ。他を当たる」
キリアのそっけない＋即答の答えにマスターは唖然とした。
キリアはカウンターから立ち上がり、マスターに背を向ける。
「失礼する」
そう一言残し、酒場を出ようとする。
しかし……。
「おい、兄ちゃん」
背後からテーブルで何人かの友達と話していた男が立ち上がりキリアを呼び止めた。
「なんだ？」
キリアは振り返る。
「おまえ誰かに似てるなぁ～と思ってたんだ」
「……」
「お前もしかして、キリア・ヴァッシュベルンじゃないか？」
「なぜ、俺の名を知っている」
キリアは顔をしかめた。

男は続ける。
「いや、クレイモアのそばに居た奴に似ていたからな。だ……なんだよ……？」
男が喋り終わる前にキリアは刀を抜き刃先を男の首筋に突きつけた。
周りが沈黙に包まれる。
「お前……クレイモアの事を知っているのか……？」
キリアは静かな声と共に男をにらみ付ける。
男は金縛りにあったように動かない。
「答えろ」
刃先が男の首の皮膚に当たる。
「ひっ！！」
「答えろと言ってるんだ！！！」
キリアは男の悲鳴をかき消すように大声で怒鳴った。
その瞬間、酒場にいた警備兵（ディリング）達がキリアに向かい駆け出す。
キリアは刀を男から下げ、警備兵（ディリング）に向ける。
警備兵（ディリング）の動きが止まる。
「貴様！何をしようとしてるか分かってるのか！？」
警備兵（ディリング）の一人がキリアに叫ぶ。
もう一人が腰につけた剣の柄に手を回す。
「お前達こそ何をしようとしてるか分かってるのか？」
キリアの静かな質問に警備兵（ディリング）達は顔をしかめる。
未だに酒場にいる人たちは動かない。
キリアの圧倒的な威圧が酒場を支配していたのだ。
警備兵（ディリング）がにじり寄る。
刃が鞘から顔を出した。
「俺の復讐を邪魔するのなら、いくら国家権力でも容赦はしない」
キリアは何かに取り付かれたように虚ろな目で警備兵（ディリング）を睨み付ける。
いや、取り付かれているのだ。復讐という因果に……。

「おい。おっさん。クレイモアが居る場所を知っているか？」
キリアは男に目線を合わせずに問いかける。
「いや、知らない」
やっと開いた口で男が答える。
キリアはそれを聞くと目を伏せ、刀を鞘に収める。
「悪かった。逆上していた……。謝る」
キリアは警備兵（ディリング）に向かって軽く頭を下げた。
警備兵（ディリング）は互いに顔を見合わせた。
そして低くしていた体勢を戻し、剣の柄から手を離した。
「今回だけだ。以後気をつけろ」
警備兵（ディリング）の言葉を聞いたキリアは頭をあげ、酒場を後にした。
外はさっきまでの静寂とは別次元のように騒がしかった。
キリアは周りを見渡した後、目的の情報屋を目指すためにまた人ごみに入っていった。

その女の子は大通りを歩いていた。
ぼろぼろの服を身にまとい、煤（すす）や泥で汚れた顔をキョロキョロと動かしている。
ここ大都市ベルフェリングは数少ない発展途上国の中心に位置しており、商売や貿易のグラフは右斜め上にしか延びていない。
商業の中心地と言われている。
だが、その分　詐欺やスリ。無職者や孤児なども他の町とは比べられないほど多く存在していた。
この女の子も例外ではなかった。
大都市の路地裏で寝ている孤児と変わりはない存在だった。
そして女の子は金を欲していた。
食べるための、生きていくための金が必要だった。
だが、こんな女の子を雇う店なんてありはしない。
と、なるとやれることは限られてくる。

そのうちのひとつをこの女の子は実行しようとしていた。
目と顔をキョロキョロと動かす姿は明らかに異様だが、人々はキリアのように間を空けて歩いたりはしない。
こういう孤児がいることが普通と思う輩(やから)が多いからだ。
可哀想にも思える状況だが、女の子にとっては好都合だった。
女の子は一人の女性に目が止まった。
白い帽子を被り、買い物大好きのお嬢様といった風な姿をした女性だ。
腕には白のキャリーバックが下げられている。
女の子はその女性に向かい一直線に歩み寄る。
そして女性の横に来ると慣れた手つきですばやくキャリーバックから顔を出していた財布を抜き取る。　女性は気づく気配を見せずに歩いていく。
女の子はすぐさま女性から離れ、大通りから外れ路地裏に入り込む。
大通りからは見えない奥の方に入ると抜き取った財布を開ける。
中には金硬貨、銀硬貨、銅硬貨が溢れんばかりに入っていて、そこに銀行カードとキャッシュカードときたら女の子のテンションがそのままであるはずが無い。
「すごい。久しぶりの当たりだ。これなら服も買える。お風呂にも入れる。やった……やった！！」
路地裏全体に響くような大声を張り上げる。
すると足元の布が動き始める。
「え？なに」
女の子は驚愕しながら後ずさる。
布の中から一人の中年の男が現れた。
この男は無職者だ。
女の子のように顔は汚れ、ぼろぼろの服を着ている。
「なんだぁ……人が気持ちよく寝てるってのに……。ん？それは……金じゃねぇか！！」

男は女の子が手に持っているものを見て声を張り上げ、女の子に近づき財布を奪い取ろうとする。
「やめて！！私のお金！」
「黙りやがれ！どうせ人からスッたんだろが！俺によこせ」
女の子の力では男の豪腕に勝てるはずも無く、無残にも財布を奪い取られてしまった。
男は満足そうにバカ笑いしながらその場を去っていく。
女の子はその場に崩れ落ち、涙を流し始める。
必死に声を出さないように堪えるが我慢できず……。
「うっ……。くぅぅ……ふえぇぇぇ」
泣いてしまった。
そんな少女に一人の青年が声をかけた。
「どうした？何泣いてる？」
涙のモザイクがかかった少女に映る青年の姿はほぼ黒の服に覆われていた。

――数分前

キリアは大通りを歩いていた。
前と同じく大通りを歩く人々は間を空けて歩いていく。
もうすっかり慣れてしまっているキリアは不快な気持ちにもならず、ただ平然と情報屋を探していた。
多くの人々とすれ違う中、キリアは向かいから歩いてくる少女の姿に目が止まった。
ぼろぼろの服を身にまとい、顔は黒く汚れている少女の姿に。
やたらと周りを見渡しながら歩くその光景をキリアは不可思議に思った。
（あの子。もしかすると……）
キリアの直感は当たっていた。

少女は狙いを定めたように白い服を身に纏った女性をまっすぐに見つめ、一直線に歩き出す。
そして……。
（やはりな……）
キリアは重いため息をつく。
用を済ませた少女はすぐに路地裏へと消えていく。
しばらくスられた女性を見ていると女性はキャリーバックの異変に気づいたようで大声を出した。
「やだーーー！！スリにあったわ！警備兵（ディリング）さん達！」
その声を聞いた警備兵（ディリング）達はその女性の下に走っている。
キリアは自分の用件を後回しにしてさっき路地裏に消えていった少女のあとを追った。
路地裏の中は足場が悪く、薄暗い。キリアは苦労しながらなんとか先に進む。
「ははははははは」
男の笑い声が聞こえてくる。
ここは何かの溜まり場なのだろうか、とキリアは思い沈んだ気持ちで先に進み続ける。
奥の方で少女のすすり泣く声が聞こえる。
（ややこしい場所だな……愚痴っても仕方ないか）
引き返そうと思う自分の心に終止符をうつように言い聞かす。
そして小さく泣く少女の前に立ち、声をかけた。
「どうした？何泣いてる？」
と。
その光景は全てを失った少年に声をかけた青年の姿と一致するものがあった。

――――――――――第一章　続――――――――――

キリアは少女に問いかけた。
だが、少女はキリアを見上げたまま涙を流す一方。
泣き止むだろうとしばらく放置していたキリアだが少女に泣き止む気配は全くない。
その事を察したキリアは腰につけている小さなポーチから飴玉を五つほど取り出した。
「ほら、これで元気出せ」
飴玉を差し出す。
少女は最初のほうは警戒するように見ていたがしばらくするとゆっくり手を伸ばし、飴玉を受け取った。
「ありがとう……」
今にも掻き消えそうな声で少女は礼を伝えた。
そして飴玉のひとつの包装紙を開け、口の中に入れた。
「どうだ？うまいか？」
「うん……」
キリアの問いかけに少女は小さくうなずく。
涙も止まっていた。
「親……いないのか？」
「うん……」
「それでスリか？」
「え？」
少女はキリアの言葉に驚きを隠せず、声を漏らす。
「返してやれ……。困ってるぞ、あの女性……」
「でも……」
少女はまた目に涙を浮かべる。
うるうるの目には全くの無垢しか映っていない。
「ないの……」
少女の言葉にキリアは首を傾げた。
キリアは少女の周りを観察する。

盗んだものらしき物は置かれていない。
ただ、一枚の金硬貨以外。
キリアは落ちていた金硬貨を拾い上げる。
金としての輝きをまだ失っていなかった。
（ついさっき落ちたものか……）
キリアは考えをめぐらせる。
‘でもないの’という少女の発言。来るときに聞こえた男の笑い声。ついさっき落ちた物だと思われる金硬貨。路地裏は無職者や孤児の溜まり場。
キリアはそれで分かる真相に最も近い答えを考える。
（この手がかりで見つけ出せる答え……か……）
キリアの頭に浮かんだ答えそれは……。
「取られたのか？」
「うん……」
「元気だせ。悪い行いで手に入れたお金なんかで良い物なんて手に入らないよ。仕事見つけて、金稼げ。」
少女は俯く。
「探したもん。でもどこも受け入れてくれないの……」
キリアはこの子を一緒に旅に連れて行きたくなった。
こんな子をこのまま放置していくなんてできない。
だが、自分の感情でこの子を危険にさらす訳にもいかない。
この二択にキリアは頭を悩ませる。
カラスの鳴き声が聞こえる。
もう夕方だ。
街灯が光りだした。
もう夜だ。
ずいぶんと時間が経った。
それでも少女はキリアから目を離さなかった。
キリアはようやく見出した答えを発した。
「がんばって生き抜け。じゃあな」

少女を連れて行かない事にしたのだ。
冷たく感じられるこの言葉もキリアにとっては一番想いのこもった物だった。
キリアは少女に背を向け、路地裏から出ようと足を踏み出す。
その時、キリアの漆黒のマントが少女の手に握られた。
キリアは振り返り、少女を見下ろす。
「なんだ？」
「お兄ちゃん。旅人でしょ？」
「あぁ」
「私も連れて行って」
まさかの言葉にキリアは言葉を詰まらせた。
少女の口からその言葉が飛び出すとは思いもしていなかったのだ。
なんと返事を返せばいいのか悩むキリアに少女は続けた。
「こんな所でのたれ死ぬのはイヤだ！」
キリアは思いつく限りの言葉で反論する。
「俺の周りには危険が常に付きまとっている。お前をそんな目に合わしたくない」
少女も負けない。
「ここで死ぬよりかは良い。ずっと良い。だからお願い」
「だめだ……だめなんだ」
「なんでも言うこと聞くから！いっぱいお手伝いするから。だから……」
「俺は！復讐者なんだ！人を殺そうとしてるんだ！」
「えっ！？」
路地裏に再び静寂が戻る。
深い闇が少女の顔を隠す。
しばらく、なにも喋らない。
その沈黙を破ったのは少女だった。
「それでも良い。お兄ちゃんについていきたい」
「っ！」

「復讐のお手伝いもする。だから……」
「わかった！わかったから……」
キリアは根負けしたように言った。
しゃがみこみ少女の頭を撫でる。
「だから……泣くな」
少女は頷いた。
その時、少女は泣いていたのだ。

「結晶石（けっしょうせき）……というとあの？」
「あぁ」
小さな部屋で二人の男が話している。
二人は机を挟み、話をしている。
机のうえには大量の本が積み重ねられ、大量の紙が散らばっている。
一人は椅子に腰掛け、もう一人は立って話をしている。
「その結晶石を利用した研究が進められていると聞いたんだが……」
「えぇ…その情報なら入ってますよ」
「いや、それを聞きたいんじゃなくてだな……ただ結晶石の発掘場所を知りたい」
「発掘場所？発掘場所でしたらウラウ鍾乳洞だったはずですが」
椅子に腰掛けている男は眼鏡を中指で押し上げた。
「ウラウか……そう遠くはないか」
「ウラウ鍾乳洞はですね部外者の侵入拒否のために特別の魔法陣トラップが組まれているんですよ」
「魔法陣？また厄介だな」
立っている男は無造作に頭を掻き毟る。
「じゃあどうすれば良い？」
「魔法使い、もしくは法陣師に同行してもらってトラップの位置を

確認しながら進むしかありませんね」
「しゃあねぇな。じゃあ探してくっか」
「私もできる限りお手伝いしましょう。使える魔法使いなどがいましたら、そちらに連絡します」
「ありがとよ。じゃあ行ってくらぁ」
立っていた男は座っている男に背を向け、部屋から出て行った。
それを見送った情報屋は立ち上がり、本棚にびっしり詰まった本のうちの一つを引っ張りだした。
「たしか結晶大爆破装置（レデルト）でしたっけ」
独り言を呟きながら本を捲り、あるページで捲る手をとめた。
この本は情報屋が集めたいろいろな情報をまとめたうちの一つである。
本の中は手書きの文字がびっしり書き込まれており、日々の努力の結晶と言える代物である。
そして、その情報屋が見るページのタイトルは……。
‘結晶石の合成に伴う装置と使用方法’
「爆破震度数千二百……。いつ読んでも化け物みたいな数字ですねぇ」
パタリと本は閉められ、元あった本棚に収納する。
情報屋はため息をつき椅子に腰かけた。

ほとんど人気（ひとけ）の無い大通りをキリアと孤児の少女は一緒に歩いていた。
キリアはいつも通り無表情。
だが少女はニコニコと微笑んでいる。
ほんとに不釣合いな光景だった。
「そういえば、お前の名前聞いてなかったな。名前なんて言うんだ

？」
「クレア。クレア・パトラディッシュ」
「クレアか……俺はキリア・ヴァッシュベルンだ」
クレアはまたニコニコ笑う。
キリアはその様子をジトーとした目で見る。
そしてまた歩き出す。

二人は復讐の物語を創造していく。
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。
復讐という名の物語を創っていく。

To Be Continued

第一章　―1　ある夜、立ち寄った店で

――――――――ある夜、立ち寄った店で――――――――

夜道を歩く二人の姿を通行者はまるで異物を見るような目で見る。
一人は一般市民とはかけ離れた服装で歩き、もう一人はぼろぼろの服を着た孤児。
一般人にとっては異物そのものだったのだ。
だが、そんな現状にも気にすることなく、一人は無表情で歩き、一人はニコニコ微笑んで歩いている。
「このまま宿に泊まりたいのも山々なんだが……クレアもその服じゃ嫌だろ？」
キリアの質問にクレアは首を傾げながらぼろぼろの服を持ち上げる。
「う～ん。そうだなぁ、どちらかと言ったら嫌かな」
キリアは一つの店を指差す。
そこはベルフェリングの中で一番人気のある洋服店。
首を使いクレアを促す。
「買ってくれるの？」
クレアがキラキラ輝く目でキリアを見つめる。
「あぁ。どうだ？行くか？」
「行くぅぅ！！！！」
クレアは片手を高らかに上げキリアの提案に即答でＯＫした。
キリアはその様子に頬を緩める。
一瞬。キリアの頭にいつかの光景がよぎる。

（なんだ？なんなんだ今のは……）
とても見覚えのある光景。だが思い出せない。
キリアはそんな憂鬱な気分にため息をつく。
その様子を見たクレアは不満そうに頬を膨らませた。
「どうしたの？いくんじゃないの？」
「あぁ……悪い悪い」
モヤモヤした残念を振り払うようにキリアは頭を勢い良く振り答えた。
先に走り出したクレアを追うようにキリアも店に入った。
中は豪華なシャンデリアや綺麗なタイルで彩られ、靴、帽子、服、ズボンはもちろん日常品は対外そろっている。
クレアは素晴らしい物を目にし、目を見開いて硬直している。
だが、店員が普通に接してくれる訳がない。
キリアがそばにいるとはいえ、クレアは道端で寝ていた孤児。本来ならこんな場所へ来るはずも無い。
そのため万引きなどという犯罪に目を光らせている。そのためだ。
（感じの悪い店だな。これが世界有数のデパートか？）
キリアは周りを見渡す。
やはり接客をしている店員以外はクレアをしっかりと見ている。
幸い、クレアはこの現状に気づいていない。
それが唯一の救いだと思う。
「どれでも良いの？」
満面の笑みでクレアは問いかける。
「生地がしっかりしてる服なら何でも良いぞ」
「やったー」
はしゃぎながら奥の方に駆けていくクレアをキリアは笑いながら追った。
ある一角で足を止めたかと思うと一着の服を取り出し、自分に合うか確かめるために体の前に持ってくる。
合わないようで、はぁ……、とため息を漏らしながら服を戻すク

レア。
キリアはクレアに追いつき、問いかける。
「どうした？それでも良いんだぞ」
キリアはさっきクレアが戻した服を指差す。
「ううん。私には合わないから……」
俯くクレア。
その答えに失笑を漏らしながらキリアは言った。
「それはあくまで見本だ。サイズぐらいは合わせられるさ」
「ほんとっ！！！！」
即答で返事。
その様子に嬉しさを隠せないキリアの顔に知らず知らず笑みが浮かぶ。
キリアがこのような表情を表すのは実に二年くらい差があった。
感情を悟られぬよう表情を隠すように言われていたキリアの無表情をクレアは自然ながらも突き破ったのだ。
そんな事をクレアはもちろんキリアも理解できるはずも無い。
キリアはレジに向け歩を進める。
それに続くようにクレアも歩き出す。
「あの服。私に似合うよね」
「着てみなくちゃ分からないが、お前なら似合うんじゃないか？」
「えへへ」
クレアは顔を赤く染めながら笑う。
それには無垢な形しか浮かんでいない。
キリアは後ろに振り向き、クレアを見下ろす。
煤だらけの顔を見つめる。
（きっと、美しい顔をしているんだろうな）
そんな事を思いながらクレアの顔をまじまじと見つめる。
「どしたの？急に？」
首を傾げ、キリアを見つめ返す。
「いや、風呂入らなくちゃって思ってな」

「え？お風呂入れるの？？」
「もちろん」
「やったー」
両手を挙げ、高らかに喜びを伝える。
その姿にキリアはまた頬を緩めた。
その笑みを浮かべたまま店員にキリアは問いかける。
「この服の他のサイズありますか」
店員はキリアとクレアを一瞥すると、少し不快な声で答えた。
「えぇ。ありますよ。どのサイズですか？」
「Sサイズで十分だろ」
キリアはクレアに問いかける。
「うん」
クレアは元気良く頷く。
それを確認にしたキリアは店員の問いかけに答えた。
「Sでお願いします」
「わかりました」
店員は在庫室に駆けて行き、しばらくすると一着の畳まれた服を持って帰ってきた。
「これになります」
そう言ってキリアに手渡す。
「いくら？」
「八百九十$になります」
キリアは小さなポーチから財布を取り出し銅硬貨九枚と銀硬貨八枚を店員に渡した。
「お買い上げありがとうございました」
店員は二人に礼を伝える。
キリアは服をクレアに渡し言った。
「その服着るのは宿について風呂に入った後にしろよ」
「はーい」
元気良くクレアは返事した。

そして洋服店を後にした。
そして人気の少ない大通りをキリアとクレアは並んで歩き始めた。
クレアは買ってもらった服を両手で包み込むように大事に持ちながら……
キリアに寄り添った。
それは仲の良い兄妹の様に……微笑みが生まれる光景だった。

二人は復讐の物語を創造していく。
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。
復讐という名の物語を創っていく。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第一章　―1　ある夜、立ち寄った店で（後書き）

更新おそいっすよね
すいません
もし読んでいてくれるひとがいたならば謝ります。
ごめんなさい。

もし読んでくれたなら感想、よろしくです

第一章　―2　夢か現か

――――――――――――夢か現か――――――――――――

――お前はキリア・ヴァッシュベルンだ。
これからの名だ。忘れるな。
今からお前は警備兵育成所（ディリンガル）の一員だ。
俺と共に一人前の警備兵（ディリング）目指し、強くなれ。

――はい。

――では、行くぞ。

――はい。

深い闇で声がこだましている。
二人の男が話をしている。
とても聞き覚えのある声だ。
誰だろう。一体、いや、覚えている。
この声は……。

キリアはゆっくり目を開いた。
映るのは真っ白な天井。
体を起こし隣のベットを見る。
掛け布団はぐちゃぐちゃでベットの上には枕と掛け布団しかない。
そうあの少女の姿が無いのだ。

（どこ行ったんだ？あいつは……）
ふと視線を下げると一人の顔が……。
「うお！っと、ぐわ！！！」
最後の一声はキリアがベットから落ちて頭を強打したときに漏れたものだ。
そうキリアのベットに寝ていたのはキリアのベットの隣のベットに寝ているはずのクレアである。
いきなりの事で動揺したキリアは後頭部を抑えながら立ち上がる。
（なんの真似だ……ったく）
愚痴を心の中で漏らし、でも決して顔には表さず赤色の椅子に腰掛ける。
（チェックアウトは正午だったな）
時計に目を向ける。
まだ正午には程遠い。
キリアはサービスで置かれている情報誌を手に取り読み始めた。

覚醒――――それは身に秘めた潜在能力を発揮させる事を言う。
ごく僅かに、ほんの一握りの逸材のみに表れ、ほとんどの人間はこの覚醒の事すら知らない。
魔法使い、法陣師、剣技魔法士なども覚醒によりなることができる。
そして今、その覚醒集団（アブノーマル）が動き出していたのだ。
世界の破滅を目論み、世界創造のために。

「で、その大事な結晶石とやらはどこに？」
白いマントを身に纏っている男が小さな少女に問いかける。
「ウラウ鍾乳洞の最深部、いまクレちゃんが行ってくれてる」
無邪気に少女が答える。

とても無邪気な声や容姿には似合わない漆黒の大鎌がわきに置かれている。
「クレちゃん？あぁ、あいつの事か……。新入りだぞ。信じれるのか？」
「大丈夫。私が保証する」
得意げに少女は腕を組む。
「ほんと何でお前が次期リーダーに選ばれたんだろうな。まだ納得いかないぜ」
「そりゃそうでしょ。私は強いし～可愛いし～賢いし～」
「よく自分をそこまで持ち上げれるもんだな」
「ほんとの事だもん」
少女の言葉に男はため息をつき。呆れる。
「じゃ、そろそろ持ち場に戻るわ！じゃあな」
「ばいば～～い」
男は少女に別れを告げ、去っていった。
少女は自分の身の丈ほどの大鎌を右手に持ち、ゆっくり男と逆方向に歩きだした。
「次期リーダーね……」
少女の呟きは淡い息と同化し空気に触れた。

凄まじい勢いで振られた剣をキリアは刀で何とか受け止める。
だが、その勢いは止まらず刀もろともキリアを遠くに突き飛ばした。
「ぐわ！」
つい漏れた声。
その半秒後には剣先がキリアの首の前に存在していた。
キリアは血の味がする唾を飲み込む。

「まだまだだな、反応速度は上達したが攻撃を抑えるほどの力が無い。もっと強くなれ」
厳しい上官の言葉がキリアに襲い掛かる。
剣先を引き、構えを取り直した上官が叫んだ。
「立て！！まだ休憩時間ではない」
その言葉にキリアは身を震わせ立ち上がろうとする
だが足に力が入らない。
いくら立とうと足掻いても力が入らないのだから立てるはずも無い。
「立てと言ってるのがわからないのか！！」
上官が剣を鞘にしまい、キリアに近づき手を振り上げる。
キリアも目を強く瞑る。
が、その振り上げられた拳は振り下ろされない。
振り上げられた手首を掴む手があった。
「少し休憩させてやれ。足が限界みたいだ」
「クレイモア……そんな甘くて良いのか？」
「こいつはまだ新米だ。まだまだ鍛錬が足りない」
「そうかよ。じゃ、休憩だ。一時間後、もう一度ここに来い」
上官は踵を返し、この場を後にした。
「大丈夫か？あいつの指導は厳しいだろ？」
クレイモアは心配そうにキリアの顔を覗きこむ。
キリアは俯き答える。
「うん……でも頑張る！強くなる」
「良い意気だな。がんばれよ」
クレイモアが立ち上がる。
そして一言
「感情は不快な理屈に不満を抱き、いつしかそれを爆発させる。良いか、キリア。感情……」
言い切る前に目の前が真っ暗になった。
そして現実に引き戻される様に少女の声が響く。

「キリアお兄ちゃん。起きてよ！朝だよ」
そうクレアの声だ。

キリアは目を開けた。
情報誌を読んでる途中に寝てしまったらしい。
すぐ横には風呂上りのクレアの姿がある。
「やっと起きた。おはよう」
しばらく沈黙の後キリアは答えた。
‘おはよう’と…

二人は復讐の物語を創造していく。
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。
復讐という名の物語を創っていく。

To Be Continued

第一章　―3　深き楽園を求め

――――――――――深き楽園を求め――――――――――

「そんな所で寝てたら風邪引いちゃうぞ」
クレアが笑いながら俺の額を人差し指で押す。
キリアはなされるがままと言った風に抵抗しない。
寝ぼけている事もあるかも知れないが。
「こんなもんで風邪なんて引かない」
「甘い！！！」
クレアの言葉がキリア言葉を一刀両断する。
そしてまた人差し指をキリアの額に付ける。
押すのではなく、付ける。
「どう甘いんだよ？　俺は今まで野宿しても風邪引いたことないぞ」
人差し指が額に付けられてる事に文句を言わずにキリアは問う。
「私の経験談！私、風邪何回も引いたよ」
自慢げに胸を張りながら答える。
「お前はな！　俺は違う」
「ん～～や！　違わない」
人差し指に力が入る。
「違わない証拠が何処にある？」
「違う証拠が何処にある？」
完璧に言い返せない返事にキリアはため息をつく。
「わかったよ。これから気をつける」

「よろしい」
人差し指が額から離れる。
クレアはキリアから少し離れた後、キリアに向き直り、体を翻しながら聞いた。
「どう？」
言葉の意味が出来ないキリアは目を細める。
「なんだ？」
その返答に嫌気がさしたクレアは頬を膨らませ、ぷいっとそっぽ向き言った。
「もう良い！！　キリアお兄ちゃんのバカ！！！」
とくあるアニメの光景である。
キリアはもう一度しっかりクレアを見る。
ストレートに肩まで伸びた髪、白色の柔らかさを放つ肌、絹で作られた旅人にピッタリの丈の短いワンピース。
絶頂の美少女と言える容姿であることを今、はっきりと理解した。
「よかったな。美少女に戻って、その服も似合ってるし。可愛いと思うよ」
キリアの言葉にそっぽ向いていたクレアの顔に満面の笑みが戻る。
クレアは必死に怒っている顔に戻した後、キリアに向き直った。
「あ、ありがとう。まぁ許してあげる」
残念ながらクレアが喜んでいることをキリアは理解していた。
口が笑っているのだから。
（わかりやすい奴）
無意識にキリアにも笑みが浮かぶ。
「なによ！　その笑みは～～？」
冗談交じりでクレアは聞き返す。
キリアは笑って誤魔化した。
時計の二つの針はもう真上に向きかけていた。

少年は走っていた。
路地を駆け、大通りで人にぶつかり、物影に隠れ。
少年は走って逃げていた。
荒く高鳴る呼吸を押さえ込み、必死に気配を消していた。
「どこに行った？」
「他の仲間に連絡だ。手分けして探すぞ」
「あぁ」
警備兵（ディリング）が走り去っていく。
少年は脱力し、地面にへたり込む。
（いつまで……逃げ続ければ良いんだろう。もう嫌だ）
少年は希望の映らない目で空を見上げた。
その先に楽園がある訳ではない。
だが少年には楽園に見えてしまう。
あの青色の空の上の楽園を求めてしまうのだ。
（だれか……俺を……ははは、無理か、俺みたいな化け物を誰かが拾ってくれるわけが無い……もう消え　たい）
挫折寸前。魂は燃え尽きつつあった。
涙も流せない。苦しみと絶望しかない少年の心には悲しい、寂しいという涙誘うものが存在していなかったのだ。
深いため息は絶望を象り、苦しみを増幅させる。
（俺の苦しみを……誰かに……）
深い闇を司る漆黒の瞳が大通りを歩く一人の少女を映し出した。
（まずはあいつだ！）
少年の右目に黄金の魔法陣が浮かび、体が魔力に満ち始めた。

「で、どこ向かってるの？」

無邪気な声でクレアはキリアに問いかける。
キリアは呆れたように答えた。
「さっきも言っただろう情報屋だ。もうこれで五回目だぞ」
「えへへ」
照れながら頭をかく。
すこしキリアは頬を緩むのを感じた。
そして目を前に向けた瞬間。
不吉な気配をキリアは感じた。
背筋がゾクっとくる感覚。キリアはこの感覚に覚えがあった。
――――――魔法陣形内に入った時の感覚
下を見下ろす。
地面には黄金の魔法陣がキリアとクレアの周りに広がっている。
(なんだ？この魔法陣形は……呪縛の紋)
「ク――」
クレアを呼ぼうとした瞬間、頭に激痛が走る。
「気絶催眠(レディンズ)」
遠くの方から魔法詠唱が聞こえたキリアは激痛を耐えながらクレアに近寄る。
「キリ――ア……お兄――ちゃん、頭が……痛いよー」
クレアが魔法陣の地面に倒れこむ。
「クレア……」
クレアに手を伸ばす。
そのクレアの背後に漆黒の髪を持つ少年が現れる。
そして虚ろかな声で言った。
「俺の……苦しみを受けろ！　絶望しろ。俺に選ばれたことを恨め！　悲しめ！　そして嘆け」
キリアの手はクレアに届くことなく地面に落ち、体も倒れこんだ。
暗い意識に……
クレアは堕ちていった。

二人は復讐の物語を創造していく。
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。
復讐という名の物語を創っていく。

To Be Continued

第一章　―4　深き楽園を求め　続

――――――――――――――深き楽園を求め　続――――――――――

「起きて下さい。大丈夫ですか？」
キリアの暗い意識の中で男の声がこだましている。
目を開けようと意識しても瞼は重く閉ざされたまま。
目覚められない。
魔法の呪縛による支配はやすやすと解ける物ではない。
魔法の対策を教えられたキリアでも例外ではない。
解けるのには時間が必要だった。
だが、時間はあまり残っていなかった。

クレアはゆっくり目を開いた。
そこはどこかの空き家の中らしく家具など一切置かれていない空間。
座っている体勢から体を起こそうと足に力を入れるが起き上がれない。
魔法陣による呪縛を受けていた。
（ここはどこ？　キリアお兄ちゃん……）
クレアは声を出さずに助けを求めた。

それがキリアに届くわけなく。
「起きたか……女」
一人の少年が右目に魔法陣を浮かべながら、身動きの取れないクレアに近づく。
「だれ……？」
クレアの問いに少年は答えた。
「絶望を、苦しみを与える者だ」
クレアはその時悟った。
少年と近い関係であることを。
孤独を見据えた漆黒の瞳をクレアは睨み付けた。
「なんの真似だ？　威嚇のつもりか？」
挑発に似た少年の言葉にクレアは反応することなく、瞳を睨み続ける。
少年はため息を漏らしながら、左手を握り締めた。
瞬間。クレアの全身に激痛が走る。
「きゃぁ！　ぐぅぅあああ」
体を仰け反らせながらクレアは悲鳴を上げる。
少年はその様子に笑みを浮かべ、左手を広げる。
「はぁはぁ」
クレアは荒く息をしながら、また少年を睨みつけた。
少年が笑みを混ぜながら言う。
「俺の魔法陣形内にいる限り俺はいつでもお前に痛みを与えられる。どうだ？　苦しいだろ！　悲しいだろ。はははは。絶望しろ！　ははははは」
少年は高らかに笑い出す。
「絶望なんてしない。だってキリアお兄ちゃんが助けに来てくれるから」
少年は笑いを止め、クレアを見下ろす。
クレアのまっすぐな瞳にイラだった少年はまた左手を強く握る。
「きゃぁぁ！　うわぁぁぁぁぁぁぁぁ」

前よりも強力な痛みに悲鳴もさらに大きくなる。
「いつまでそんな口を叩けるか試してやる」
「うわぁぁぁぁぁぁ」
クレアは悲鳴を上げながら、涙流すことなく信じた。
キリアが助けに来ることを。

クレアの叫び声が意識に聞こえたような気がしたキリアは目を開いた。
周りは薄暗く、小さな照明の下に無数の紙が散らばっている。
そしてその奥に人影。
その気配に気づいたキリアはすぐに立ち上がり、その人影と間を取る。
そして刀の柄に手をかける。
「おや、お目覚めですか？　元気が良くて何よりです」
キリアが刀を構えようとしているにもかかわらずその人影は平然と言葉を発した。
キリアはこの人が敵ではないと判別し、柄から手を引く。
「びっくりさせて悪かった。お前は誰だ？」
キリアの問いかけに人影は照明を自分の顔に当たるようにし答えた。
「ディナード・モスキーナ。ここで情報屋を営んでいます」
キリアはディナードという名前を聞き、眉を動かした。
「あぁ！　お前が！」
「私をご存知で。これは嬉しいことです。ありがとうございます」
ディナードは椅子から立ち上がり深々と頭を下げる。
キリアもつられるように頭を下げる。
「どうして俺がここにいるんだ」

キリアは頭を上げ聞いた。
「いやぁ。目の前でいきなり倒られたらいくらなんでも助けますよ」
笑いを混ぜながらディナードは答えた。
「なら、もうひとり倒れた女がいただろう！？」
「えぇ、ですがその子は身内の方が助けていらっしゃいましたよ」
「身内？」
「えぇ、黒髪の少年です。双子の兄妹と言っておられましたが……全然似てなかったですね」
キリアは無表情のままディナードに近づき、資料だらけの机に手を置いた。
「そいつは敵だ！　俺がクレアの身内だ！」
「やはりそうですか……では、あの魔法陣は本物だったのですね」
ディナードは手を顎につけ、うんうんと頷く。
「魔法陣が見えるのか！？」
キリアは飛び上がらんとばかりの凄い勢いで聞いた。
するとディナードは右手の人差し指を自分の口に当て言った。
「大人の事情です」
そして不敵に笑う。
「そいつの居場所を知ってるか？」
キリアの問いにディナードは口を緩め、言った。
「普通は教えないんですが、事情が事情ですしね……。いいでしょう。場所は西街区二番地の二階建てのアパートの中です」
「なんで知ってんだよ？」
キリアの問いにディナードは笑みを作りもう一度言った。
‘大人の事情です’と……。

二人は復讐の物語を創造していく。

繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。

復讐という名の物語を創っていく。

To Be Continued

第一章　―5　呪いの覚醒秘話（前書き）

更新遅れてすいませんでした。

第一章 ―5 呪いの覚醒秘話

――――――――――――――――呪いの覚醒秘話――――――――――――――――

キリアは必死に大通りを駆け抜ける。
人にぶつかりかければ紙一重でかわし、人の迷惑関係無しで走り抜ける。
クレアが呼んでいる。
あいつが俺を呼んでいる。
意識に届いたクレアの声から、危険、を感じ取ったキリアはクレアが呼んでいることを意識した。
(俺が行かなければクレアは……)
情報屋から聞いたクレアの居場所に向かい、キリアは走った。

クレアはゆっくり目を開けた。
激しい痛みのせいで意識が飛んでいたのだ。
体を動かそうとするが、変わらず魔法の呪縛を受けているため身動き一つ取れない。

周りを見渡す。
魔法陣使いの少年の姿は無い。
クレアははぁ……と安堵の息を吐く。
でもこれからどうするか。
一番の問題を考える。
クレアは覚醒者でもなければ頭の切れる秀才でもない。
呪縛からの開放策など見当もつかない。
（キリアお兄ちゃんが駆け付けてくれたらなぁ）
一番の開放策。
とても人任せだなと今度は情けない息を吐く。
すると、何も無い部屋の扉が開いた。
右目に魔法陣を浮かべた少年が入ってきた。
「起きたか……」
少年はクレアの前に立った。
少年の目をクレアはまた睨みつけた。
「まだそんな目で俺を見るか……俺を非難するその目で」
少年は大きく息を吸い込んだ後、大きく叫んだ。
「周りの人間は全てそんな目で俺を見る！！　俺以外の人間はクソだ！」
今にも泣き出しそうな、そんな震えた声だった。
クレアはゆっくりと喋り始めた。
その声はとても深く重い物だった。
「私も前までそう思ってた」
「？」
少年は眉をひそめた。
「私以外の人間は必要ないものだって。だから他の人間からお金を盗っていた。他の人間が苦しもうと私には関係なかったから」
少年は黙って耳を傾けていた。
「でも、キリアお兄ちゃんは違った。独りだった私を拾ってくれた。この時確信したの……人間にも私を見てくれる人がいるって」

「だからどうしたって言うんだ」
クレアが言い終わった瞬間に少年は吐き捨てた。
「だから、もう少し耐えてみようよ」
「お前は俺のことを知らないからそんな口が叩ける……。……いいだろう。教えてやる」
少年は語り始めた。
五年前の覚醒の物語を。

俺は小さな村の住民だった。
家族は妹だけ、両親は他界。もうこの世にはいない。
お金の支給だけ村長にしてもらい、日常生活は妹と二人っきり。
辛いことやしんどい事があったけどなにより楽しかった。
お前も知っているだろう。この頃、覚醒集団(アブノーマル)が村荒らしをしていた事を。
ある日、俺の住む村に覚醒集団(アブノーマル)がやってきた。
もちろん、目的は村荒らし。
村荒らしといっても村の皆は皆殺し。
入り口からは逃げれないので村の奥に逃げて、身を隠すことにした。
だがその努力は空しく、覚醒集団(アブノーマル)に見つかってしまった。
相手は5人。それに覚醒者だ。太刀打ちなど出来やしない。
覚醒集団(アブノーマル)の一人が妹に手を伸ばした。
守らないと、そう思った瞬間だった。
頭の何かが外れた。
その時が俺の覚醒の瞬間だった。
力がみなぎった。
だが、覚醒者なりたての子供(ガキ)が覚醒集団(アブノーマル)の一人に勝てるわけなど無い。

散々にやられた。
とどめの一撃を相手が振り上げた時。
次は妹が覚醒したんだ。
それだけじゃない妹の覚醒は俺より数十倍、いや、もっと上の覚醒だった。
右手に黒い大鎌が現れたかと思うと、目の前は血の海だった。
目の前には死体が五つ。覚醒集団（アブノーマル）の死体だった。
その死体の上に立つように妹は身の丈ほどの大鎌を構えて立っていた。
俺の体も妹の体も返り血で真っ赤。
その時はじめて、妹に恐怖した。
それからだ。
妹は俺から離れていき、俺は一人になった。
スリをし万引きをし、どうしようもなかった時は覚醒能力を使った。
それから覚醒者であると警備兵（ディリング）にバレ、追われる身になった。
そして現在に続く。

「わかるか、覚醒を背負った人間の辛さを」
語り終わった少年はゆっくり目を閉じた。
「だからこそ、耐えてみようよ。あと少しで私みたいに」
「黙れ！！！　それ以上、俺を語るな！」
少年は左手を強く、さっきよりもより一層強く握り締めた。
「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
クレアが悲鳴を上げる。
普通の部屋だというのに嫌というほど悲鳴が響く。
だが悲鳴の中で深く恐ろしく落ち着いた冷静な声が重なった。
「人の身内に手を出すとは、見上げた根性だな」

クレアが待ち望んだ男の姿が少年の首元に刀の切先（きっさき）を当てる状態で立っていた。

二人は復讐の物語を創造していく。
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。
復讐という名の物語を創っていく。

To Be Continued

第一章　―6　聖母

―――――――――――――聖母―――――――――――――

少年はすぐに刀の切っ先から離れ、体勢を立て直す。
キリアは少年から目を離さずにクレアに近寄る。
クレアは痛みから解放され、激しく息をしている。
「大丈夫か？」
「うん。……ありがとう」
「ばか野郎。礼なんていうな」
キリアは意識を少年のみに向ける。
少年はキリアの瞳を睨みつけ、左手を大きく開く。
「俺に近づけば、そこの女を殺す」
キリアの眉がピクリと動く。
それに続くように足も止める。
「そうだ。それで良い」
「……くそ」
小さく声を吐く。
「刀を下ろせ。そしてこちらに投げろ」
キリアは刀を徐々に伏せていく。
少年の口がにやけ始める。
だが、キリアには刀を上げることが出来なかった。
キリアは悔しさで歯軋りを行う。
その時、クレアが叫んだ。
「私に構わず、その子をやっつけて！」
キリアは優しい笑みを浮かべ、クレアに振り返る。

「俺がここに来たのはお前を助けるためだ。こいつを殺すためじゃない」
そう言って刀を地面に置き、少年に向かい、蹴り飛ばす。
ちょうど少年の足元に刀が行く。
少年は刀を拾い上げ、床に突き立てる。
「物分かりが良くて助かるぞ」
少年はキリアに向かい、右手を突き出す。
瞬間、キリアの足元に黄金の魔法陣が浮かぶ。
避けようと思えば避けれたはずだったのだがキリアは避けずにその魔法を受けた。
「呪縛苦痛（エメント）」
少年は右手を握り締める。
キリアは激痛に襲われる。
だが、決して声を出さず、その場に片膝つく。
「キリアお兄ちゃん！！」
「はははは！　良いぞ！　もっと泣け！」
少年はバカ笑いを始める。
だが、キリアは黙って攻撃を受けている。
クレアは無力な自分を恨んだ。
どうして私はこんなに弱いのか。
どうして助けられないのか。
恨み、そしてキリアを助けたいと願った。
だが、現実は厳しくクレアに襲い掛かる。
現状。助けられないのだから。
「うわわわわわわぁぁ」
大声を張り上げ泣いた。
キリアはクレアの泣き声聞き、振り返った。
（なんで、泣く？　何もされていないはずだ。なのになぜ）
キリアは理解できなかった。
人の事を想い、泣くという事を。

だから途切れ途切れの声で言った。
「泣くな……傷つくのは俺だけで良い……だから……逃げろ」
クレアはしゃっくりを上げながらキリアに聞き返した。
「逃げる？」
「そうだ……」
「やだ……」
小さく言った。
「やだ。やだやだやだやだ」
だんだん声が大きくなる。
それに伴い、クレアの体が赤く光りだす。
「クレア……？　バカな……お前がそんな」
キリアは何が起きようとしているのかを理解した。
そう。体が光るのは……。
「やだぁぁぁぁーーーーーーーー！！！」
クレアは叫んだ。
瞬間。クレアから凄まじい魔力が解き放たれる。
黄金の魔法陣もその魔力に耐え切れず、砕けて消える。
「なんだ？？　なにが起こった！？」
少年は自分の魔法陣が砕かれたことに戸惑う。
不意に右手が広がる。
キリアは痛みから解放される。
「殺してやる！！！　衝撃閃光（エリクサ）！！」
クレアが右手を前に突き出し、少年に人差し指を突き立てる。
人差し指の指先に魔力が溜まり、一筋の閃光となって少年の肩をかする。
「ぐっ！！」
少年は傷ついた肩を掴む。
クレアはもう一度、詠唱を始める。
「大衝撃閃光（エリンサー）！」
次は手の平に魔力が集まり始め、とてつもない威力を誇る閃光が

少年に向かう。
少年は迫る閃光をただ見ることしか出来ず。
大爆発を起こす。
幸いアパートが崩れることはなく、揺れる程度で済んだ。
クレアは激しく息をしながら、その場にへたり込む。
「やっちゃった……。殺しちゃった……」
クレアはものすごい罪悪感に襲われる。
自分が人を殺したという重さに。
が、それを救い出すようにキリアの声がクレアに届いた。
「全く。力加減を知れ！　バカ野郎」
キリアは座り込む少年の前に立っていた。
少年は肩からしか血を流しておらず、大衝撃閃光（エリンサー）を受けた傷は見られない。
「え？」
「俺が間に合わなかったら、お前、人殺しになっていたんだぞ」
そう。大衝撃閃光（エリンサー）をキリアは止めたのだ。
「あれれ、キリア……お兄ちゃん……」
キリアは黙ったままクレアに近づき、手を差し出す。
「立て」
「う、うん」
クレアはキリアの手を掴み、身を起こした。
キリアはまた少年に振り返る。
「おい！　小僧」
少年は顔を上げる。
「お前がこれからの行動をどうしようが知ったこっちゃ無い。今までみたいに人を殺しても良いし、行動を改めても良い。そこはお前に任せる。俺がどうこういう事じゃないしな。　だがな、クレアを選んだのは間違いだったな。クレアを選んだから俺がここに来たわけだし、クレアじゃなかったら俺はここに来なかった。これに関しては失敗だったな。　お前の行動が間違っているとは言わない。お

前の人生だ、お前が決めろ。　ただ、‘失敗’しただけだ。　今後の行動はもう少し考えるんだな」
長い説教を言い終わったキリアは踵を返し、ドアに向かう。
クレアは一度、俯いて座る少年を見てからキリアの元に向かう。
だけど、やはり少年のことが気になり、もう一度振り返る。
少年はまだ俯いている。
クレアは少年に歩み寄る。
キリアはドアを開いた後、立ち止まった。
「ねぇ」
「……何だよ」
少年はクレアの呼びかけに素っ気無く返す。
「私達についてこない？」
「何？」
「なんか、ほっとけないよ」
「知ったことじゃない。帰れよ」
「変われるってキリアお兄ちゃんが傍にいれば」
「なぜ分かる」
「私は変わっていってる実感がある」
「うるさい。かえれ」
クレアはしゃがみ込み、少年を抱きしめた。
少年は唖然とし、声もでない。
「ほっとけないの。あなたを見てると……今にも崩れそうなあなたを見てると」
「……」
「私と一緒に、キリアお兄ちゃんと一緒に、生きようよ。絶対に変われるから、絶対に生きてる意味を見出せるから」
「良いのか……？　俺は一度、お前を殺そうとしたんだぞ」
「私も殺そうとしたよ。お互い様」
「あの男は？」
「許してくれるよ。だってさっき、お前がこれからの行動をどうし

ようが知ったこっちゃ無い，って言ってたし」
キリアは墓穴を掘ったとばかりに，あっ，っと声を漏らす。
「本当に……」
「うん。良いんだよ」
少年は涙を流した。
自分を救ってくれる人がいることを知り、自分を抱きしめてくれている。
その事に涙した。
キリアはその光景を横目で見て、頬を緩めた。

「まったく、あいつはホントに、聖母（せいぼ）みたいな奴だ」

キリアは自分もその聖母（クレア）に包まれているということを理解してはいない。

三人は復讐の物語を創造していく。
生きる意味と存在の答えを求めながら、
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。
復讐という名の物語を創っていく。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

プロローグ&第二章

――――――――プロローグ――――――――

純白に彩られた大部屋。
だがその大部屋を照らすのは天井から吊るされた杯の上に灯る青い炎のみ。
純白の部屋も青白く光るだけ。
その中で青い炎に影を遊ばせながら一人の少女と一人の男が『作戦』について話し合っていた。
「魔華花弁（ピニオン）での魔力吸収の方が手っ取り早い」
「明らかに警備兵（ディリング）に感づかれるぞ」
少女の提案を男は却下する。
少女は頬を膨らませ反抗する。
「じゃあ魔華花弁（ピニオン）を使わずにどうするって言うのよ」
「別に魔華花弁（ピニオン）の発動を反対しているのではなく、ベルフェリングでするのはどうかと言っている」
「一番集まるじゃない」
「絶対ベルフェリングでなくとも良いだろう。空気中の魔力も微量だしな」
「うるさ～～い！！　リーダーの命令は絶対なの！！」
少女はムキになってる。
顔は真っ赤に染まり、犬歯をむき出し、うぅぅ～と唸っている。
可愛くも見えるかもしれないが、見ようによってはものすごい怖い顔だ。

「絶対！　絶対！　絶対！　絶対ぃぃぃ！！！」
「分かった。分かったから、落ち着け」
頑固というか我侭というか……いまいち分からない反応に男は仕方なく折れ、なだめた。
「ふぅぅ～～。なら早く行くわよ」
獣が吐き出しそうな呻き声を漏らしながら少女は『作戦』の実行のためそばの大鎌を持った。
それを肩にかけ、歩き始める。
男は少女を追う。
少女が純白のドアの前に行くと勝手にドアが開く。
それと同時に杯の炎が消える。
「さぁ、いきましょ！　レデント」
少女は男の名を呼んだ。
「了解。スレイディッシュ」
男も少女の名を呼ぶ。
「違うでしょ！　私は……」
「あ～はいはい。すいませんね、レイ」
「そうそう」
スレイディッシュとレデントは大都市ベルフェリングに向かい、研究所を出た。

――――――――第二章――――――――

キリアはゆっくりベットの上で体を起こした。
真っ暗な部屋だが、窓から差し込む月の光で中は薄暗い。
覚束ない意識の中、視線を隣のクレアのベットに向ける。
ベットの上には散らかり状態の布団だけが散乱している。
その光景を目にし、キリアは前にもこんなことがあったのを思い

出す。
（そういえば、前は俺のベットに潜り込んでいたんだったな）
視線を下ろすと目の前に眠っているクレアの姿があった。
安らかな寝息をたてて眠っている。
（そんな顔して寝られたら、たたき起こすことも出来やしない）
キリアは静かにベットから出て、窓際に向かう。
外の月はまん丸で凛々と輝いている。
（なにか、不吉な輝きだ）
なぜかキリアにはそう感じた。
（きっと何かが起こる）
胸騒ぎがするわけでもない。
ただただ、思っただけ。
だけど、この予感が当たりそうな気がしてならなかった。
「どうしたの？　キリア？」
キリアが振り返った先には一人の少年が立っていた。
少年は前回、キリアと戦った。
負けた後、クレアの誘い？によりキリアの復讐劇の仲間となった。
名はリーフ・クレイディア。
「いや、ただ月を見てただけだ」
キリアは自分の感じたものを隠し、リーフに言った。
「月？」
リーフはキリアの横に行き、一緒に月を見上げる。
リーフが重く口を開いた。
「嫌な月だな」
「お前もそう思うか」
「キリアも？」
「あぁ」
二人はいつも以上に輝く月を見上げ、眉間にしわを寄せた。……

幼い警備兵（ディリング）が夜明けの街を歩いていた。

「起きてよ〜〜。朝だよ」
クレアが部屋の中に響き渡るほどの大声を張り上げた。
この声には流石にビックリ。
リーフとキリアはベットから転げ落ちた。
「焦る〜。ビックリするだろ」
リーフが後頭部を抑えながら立ち上がる。
「……ったく」
キリアはため息を吐く。
昨晩、月の異常な輝きが気になり、夜明けまで眠れなかった二人は正直な所、眠いのだった。
「チェックアウトまでまだ時間がある。もう少し寝かしてくれ」
チェックアウトは正午。
だが、今の時計の短い針は左斜めを指している。
二度寝したとしても十分間に合う。
「私、暇だよ」
「テレビでも見てろ」
キリアはそう言うと、ノソノソと布団に潜った。
クレアは頬を膨らませながら寝転ぶキリアに近寄り、体を擦った。
「ねぇ、ねぇってば」
「〜〜。リーフ、相手してやってくれ」
キリアは文字に出来ないうめき声を出しながら、リーフに頼んだ。
（ホントに眠いんだな）

キリアのうなだれようを見て、リーフは言った。
「分かったよ」
「頼んだ……」
すでに布団の中からは寝息が聞こえている。
クレアは不機嫌真っ盛りで顔を真っ赤にしている。
リーフは不安を背負いながらクレアに近づき言った。
「とりあえず、顔……元に戻せよ。スッゲーブサイクだぞ。その表情」
後、リーフは右頬に真っ赤な痣をつけたまま、クレアと時間を潰した。

その警備兵（ディリング）は街の中で時々立ち止まると地面にしゃがみ込み、また立ち上がり歩き出す。
何かを探すように、幾度としゃがみ込み、立ち上がり、しゃがみ込む。
幼い警備兵（ディリング）の少女は立ち上がるたび、歯を軋ませていた。

三人は復讐の物語を創造していく。
生きる意味と存在の答えを求めながら、
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。

復讐という名の物語を創っていく。

To Be Continued

第二章　―1　危険な取引（前書き）

更新遅くてすいません。

第二章　―1　危険な取引

「ありがとうございました」
ホテルの従業員が出て行くキリアたちにあいさつする。
今はちょうど午前零時。
太陽が一番高く上がる時。
が、残年ながら太陽は雲にさえぎられ、うす暗い光しか地上に落せてはいない。
雨もぽつぽつとはふるものの、傘が必要と言うわけではない。
キリアは空を仰いだ。
「雲行きが怪しいな、すぐ向かうぞ」
「うん」
「了解」
クレアとリーフもそれに続く。
雨が降っているせいか、大通りに人気は余りない。
前のように人の海に入る心配はなさそうだ。
キリアは、クレアの居場所を教えてくれた情報屋の元に急ぎ足で向かった。

二人の旅人が幼い警備兵（ディリング）の横を過ぎ去る。
幼い警備兵（ディリング）はその旅人に視線を向け、後をつけ始めた。

「で、キリアの旅の目的ってのは一体なんなんだ??」
リーフが歩くキリアに向かって問う。
キリアは何も答えず、ただ情報屋の元に向かっている。
「…?　内緒ってことか??」
リーフは少し苛立った声を出した。
その様子にクレアは何とか場の雰囲気を治めようと言葉を紡いだ。
「人探ししてるの」
「人探し??　なんで?」
「それは……その…お礼を言いたいからだって」
必死に言葉を探し出した。
リーフはそうなのか?とキリアに再度聞いた。
するとキリアはクレアのフォローを消し去るように吐き捨てた。
「そいつを探し出して、殺すためだ」
しばらくの沈黙。
リーフはため息をつき、首を左右に振った。
「ふーん。聞いて悪かったな」
「別に構わない」
明らかに許していないであろう。
場の雰囲気は悪くなる一方である。
クレアはオロオロするも、何も言い出せず……。
三人は沈黙を続け、歩いた。

情報屋はそこまで遠くにあったわけではなかった。
実はキリアがベルフェリングに来て最初に立ち寄った酒場の二階だったりした。
そのことは絶対にキリアはクレアたちに口外しないことだろう。
酒場の横にある階段。
この上に情報屋がいる。
中は薄暗く、天井から吊るされたランプが唯一の足場の便りとなる。

キリア達はゆっくり階段を上り、その先にあったドアのぶに手をかけた。
「なんか気味が悪い……」
クレアはキリアの服袖を握る。
リーフは機嫌の悪いキリアにどう対処すべきか頭を悩ませっぱなし。
気持ちが団結しない旅人達である。
ドアが静かに開く。
中から、一人の男の声が響く。
「来て下さると思っていましたよ」
その声には僅かに笑みの色があった。

二人の旅人は立ち止まり、地面にじゃがみ込む。
その光景を幼い警備兵（ディリング）は目にしっかり焼き付けた。

キリア達は軋む床を歩き情報屋……ディナード・モスキーナの目の前に行く。
「先日は助かった」
「いえいえ……。ああ言うのも私の仕事ですから……。で、ここに来たのはお礼だけでは無いでしょう？」
ディナードは不敵に笑った。
キリアは話が早くて助かると思い、言葉を発した。
「人探しをしてる」
「どなたでしょうか？？　有名な方ではないと、わかりませんよ」
ディナードは立ち上がり、資料が詰め込まれているタンスをあける。
「クレイモア・ディスタンス」

「…！！　あの…クレイモアですか」
ディナードは呟き、タンスの奥の方からひとつのファイルを取り出す。
慣れた手つきでファイルを捲っていく。
開かれたページには、一人の青年の写真と身分、情報がぎっしりと書き込まれている。
さすがは、情報屋。
キリアは知らぬ間に口を緩めていた。
「クレイモア・ディスタンス。ビンゴブックS級の重犯罪者ですね。何故……この方を？」
「色々あってな」
「言えない事情ですか……。まぁ、構いませんが」
「で、どこにいる？」
「残念ながら、どこにいるかはわかりません」
ちっとキリアは舌打ちする。
「ですが、検討ならつきます」
「どこだ？？」
「覚醒集団（アブノーマル）です」
「なっ！？」
目を見開くキリア。
なんの話か理解できていないのか、クレアやリーフは違う話で盛り上がっている。
「そいつらはどこにいる？？」
「そうですね……。ひとつ提案があります」
「なんだ？」
「見た所、後ろにいらっしゃるお二方は覚醒者なようで」
「だったらなんだ？」
キリアは刀の柄に手を回す。
もし、警備兵（ディリング）に引き渡すなどという取引を言うのなら、この場でディナードを切りつける。

その意思表示でもあった。
ディナードは、笑みを浮かべ手をひらひらと振る。
「大丈夫ですよ。警備兵(ディリング)に引き渡すなんていいませんから」
「では、なんだ？」
「あなた方にウラウ鍾乳洞からの結晶石採取を取引としようと思いまして」
ディナードはここにきて、ウラウ鍾乳洞の話を切り出した。
キリアは目を細め、怪訝な顔をする。
「あそこは、侵入禁止区域のはず」
「だから、お願いするのです。覚醒集団(アブノーマル)の情報を流すという犯罪を人に負わせるのですから」

ディナードは、ウラウ鍾乳洞への地図を一枚取り出し、キリアに差し出した。

幼い警備兵(ディリング)は二人の旅人がしゃがみ込んだ場所をくまなく調べ始めた。

三人は復讐の物語を創造していく。
生きる意味と存在の答えを求めながら、
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。

復讐という名の物語を創っていく。

ontinued

To Be C

第二章　―2　変わった景色、始まる鼓動

土の感触が懐かしい。
先ほどまで大都市のアスファルトの上を歩いていたので、とてもキリアは懐かしく感じたのだ。
今までは、土を踏みしめる音しか響かなかったこの道。
だが今は、明るい声が土の寂しい音を掻き消して騒ぎ立てていた。
「でね！　その男の人が転んで！」
「あはははは。　バカじゃん」
無邪気な声が響いていた。
クレアは楽しそうにさっき見た男のずっこけシーンをリーフに伝えている。
リーフはそれを聞き、大笑い。
たいへんに盛り上がっている。
キリアはその話には加わらず、ただクレアたちの半歩前を進む。
向かうのはウラウ鍾乳洞。
貴重な結晶石の採掘場所として多重の結界魔法トラップが組まれ、立ち入り禁止とされている。
その結界トラップは、覚醒者には確認することができる。
解除。となるとそれ相応の能力と知識が必要となるが、それを避けて通るというのは容易い物。
だが、確認したところで、それがどんなトラップなのか。
それを認識するにはそれなりの能力が必要である。
が、うまいことにクレアはその能力を兼ね備えていると、ディナ

ードが言っていた。
力の制御もままならないクレアにそんな能力があるとは疑い深いが、現状そんなことも言ってられない。
キリアはディナードの言葉を信じてみた。
「ホテルの店員がそこでその子にぶつかって」
「うんうん」
次はリーフの話に変わってる。
その話にクレアは食いつくように真剣に聞いている。
仲が良い。
キリアはその光景を目の片隅に置き、なおもクレア達よりも半歩前を歩いた。

二人の旅人は歩を止めた。
後ろからつけてきている警備兵（ディリング）の存在に感づいたのだ。
その旅人の一人。
黒色の衣を羽織った少女が口を開いた。
「どうするの？？　もう魔法陣の設置は終わったけど、あんなにしつこくつけられたら魔法の発動もできやしない」
その言葉にもう一人の同じく黒い衣を羽織った男が答える。
「レイの孤立魔法陣なら、つけてきている警備兵（ディリング）も気づいていないだろう」
「うん。多分ね。でも魔法陣じゃなくて魔法の発動には因果孤立は意味ない。完璧に感づかれちゃうよ」
旅人のフリをした覚醒集団（アブノーマル）の二人、スレイディッシュとレデントは溜め息をつく。
因果孤立。それは発動者以外の人間はその魔法、魔法陣の存在に気づけなくする能力のこと。
使う者のレベルにより、因果孤立をかけれる魔法は増えるが、そ

のレベルでは抑えきれない魔法。つまり、完璧にマスターしていない魔法になると因果孤立は全く意味を成さない。ただ単に魔法力を消費するだけ。

スレイディッシュは今から行う魔法が自分についていけていないと認識しているため、因果孤立を使わず、魔法を発動する環境を求めている。

その求める環境には、今つけてきている警備兵（ディリング）が邪魔だった。

「だから、大都市での魔華花弁（ビニオン）発動を止めたんだ。ったく」

「うぬぬぬぬぅぅ〜〜」

スレイディッシュは顎に手を運び、頭を悩ませる。

レデントは後ろを振り向かずに、警備兵（ディリング）の気配を探る。

一点に灯る灯火。

警備兵（ディリング）の気配だった。

そこでレデントは気づいた。

旅人の服装を装った自分たちを怪しんで、孤立魔法陣を仕組んだ場所を探っていた。

探したら探したでどうして自分たちの後をついてこれるのか。

最初のほうは人で大通りは充満していた。

少しでも目を離せば、すぐに見失う。

だが、つけてきている警備兵（ディリング）は、立ち止まるものの確実に自分たちを追ってきている。

そして、この警備兵（ディリング）が捜索部隊（イエーガー）だとしたら……。

（あいつも感知魔法を持っているということか……。となるとまくにはちと厳しいな）

そこでレデントが思いついたもの。

それは……。

「レイ。空間転移（ニフレ）魔法を使おう。少しでもあの警備兵（ディリング）が離れれば事足りる」

「え？　うん。そうだねそうしよう！　じゃ、さっそく」

相手が指定空間内に入ったときに発動する空間転移魔法。それが

ニフレ。
空間内に入った相手を違う場所へと飛ばす魔法である。
その魔法詠唱をスレイディッシュは始める。
足元に赤色の魔法陣が浮かび、すぐに消え去る。
因果孤立を発動したためである。
その空間転移魔法（ニフレ）の発動に二人の覚醒集団（アブノーマル）を追っていた幼い警備兵（ディリング）は気づいていない。

いつまでも続く大海原を見ながら半歩前に歩を進めるキリアにクレアは呼びかけた。
「キリアお兄ちゃん！」
「……何だ？」
「キリアお兄ちゃんって覚醒者？？」
「！？」
「あぁ。俺も気になるかも」
簡単に聞いてくれるものだ、とキリアは嘆息しながら答える。
「あぁ……。一応な。あまりそういうことは聞くもんじゃない」
肯定と説教が混じった返答にクレアは頬を膨らませる。
リーフはキリアの顔を見上げ、何かを思い出すように遠い目をしていることからキリアが何を考えていたのかを察した。
（キリアにも、昔はあるもんな）
あえて、追求はせず、次の話題へと話を変えていく。
キリアもその話に加わって。

いつの間にか、三人は並んで歩いていた。

三人は復讐の物語を創造していく。
生きる意味と存在の答えを求めながら、
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。

復讐という名の物語を創っていく。

To Be Continued

第二章　―3　不可解な点

いつも目に入ってきた大海原も今は、林の木々に遮られ見えない。
大都市から離れ、人工的なものが無くなってくるこの地域。
それを、ウラウという。
キリアたちはそのウラウの中を歩いている。
先ほどまでの喧騒はない。
今は、ただ静かに足音、木々の揺れる音、動物の鳴き声だけが響いている。
「……怖い……」
クレアはリーフの服の裾を掴む。
その態度にリーフはクレアの頭を撫でる。
そして、自分も恐怖を紛らわす。
やはりまだ子供。こういう薄暗い場所は苦手なようだった。
「もう少しだな……」
この環境に動じないキリアはディナードから貰った地図を頼りに言葉を発する。
「もう少しって後、どれくらいだ??」
リーフの問いかけに。
「この林を抜けたらすぐだ」
キリアは曖昧な返事を返す。
「だから、どれくらい！？」
「……数時間だ」
機嫌悪そうに返事をする。

リーフも同じく機嫌を損ねる。
「……。仲良くしようよぉ」
険悪な雰囲気になった仲間たちにクレアは弱弱しく言った。

薄暗い部屋。
その中には、幾つ物書類に埋もれ、足場がほとんどない床。
唯一の家具。机と本棚にも同じく書類が溢れている。
その書類に埋もれた机を挟み、ディナードと男は話していた。
「話はつきました。きっと成功して帰ってきてくれますよ」
「そっか……。そりゃああありがたいね」
「しかし、なぜ結晶石を??」
「いやーな。俺はただの趣味……みたいな」
男は笑いながら言った。
「趣味にしては危険ですね」
「男のロマンなのよ!」
「そうですか」
今一、男の話についていけないディナードは、ただ相槌を打つ。
「気になることがあるんだがな」
「なんです?」
男が疑問を口にする。
「以前、月が明るかったことがあったんだ。いつも以上に……。あれはもしかして……『吸血姫(きゅうけつき)』じゃ」
「そんなことはないでしょう。昔に封印された『吸血姫』が復活するとは考えにくいですし」
ディナードは本棚からひとつのファイルを取り出し、パラパラと

ページを捲る。
そして、とまったページには『吸血姫』の事が記されている。
そこに見つけた不可解な点と共に。
「そういえば『吸血姫』の血液を用いた実験が警備兵（ディリング）の研究隊（ノエンティスト）内で行われたみたいですね」
「警備兵（ディリング）が？　これまたなんで？」
「分かりません。そこまでの詳細は不明です。とても嫌な予感がしますが」
「だな……」
沈黙が漂う。
あーだこーだ言っても『吸血姫』の事が気になる。
２０年前に起こった吸血鬼（ルジュ）病。
あれが頭から消えてるわけもなく。
『吸血姫』という名前がどうしても頭から離れなかった。

『吸血姫』の血液実験を行っているのが、警備兵（ディリング）だけとディナードは思っていた。
『吸血姫』復活実験が行われているとは、知る由もなく。
だれも、その情報を会得してはいない。

足を止めたキリアたちは、ひとつの洞窟の入り口と睨めっこしていた。

ウラウ鍾乳洞の入り口である。
思いっきり結界トラップが組まれているのが目に見え、どうしたものかとキリアは息をついた。
クレアは必死にどういった魔法トラップか調べているが、元々魔法の学力は少ない。
どんな効果を持つかもあやふやで、さらに魔法名称も分からない。
悩むクレアの顔は鬼の形相に近かった。
その顔を見たリーフは必死に笑いを堪え、結界トラップを見つめる。
息が微妙に違う仲間たちである。
「えっと、この魔法はぁぁ……。　入ったら、ぴゅっとなってビューて飛ばされちゃう感じ？」
「どんな感じかと俺に聞き返されても困るんだが？」
「ご、ごめんなさい」
「その表現からだと空間転移魔法が一番近いんじゃない？」
リーフの言葉にキリアは頷く。
リーフは大抵の初級魔法は会得しているので、空間転移魔法という魔法名称も魔法効果も知っている。
天才と言える能力を持った少年。
もっと違った生き方ができていたらと、キリアは思う。
「外傷的なダメージはなさそうだな」
「きっと、トラップにかかると入り口まで飛ばされる仕組なんだろう」
「なるほど……」
勝手に話を進めていくキリアとリーフ。
クレアは意味が分からずとも、分かったフリをして頷いている。
「じゃあ、行くとするか」
「なぜ、お前がリーダー的立ち位置についているか俺には理解できないんだが」
「は？　なんだって？」

「やめようよ！　二人とも……！！」
泣きそうなクレアの叫びに、リーフとキリアは喧嘩を止め、無言で結界トラップが発動しないところを歩く。

その先で出会う。
大きな力を持ち、絶対的な力量差をキリアたちに見せ付ける……
一人の男に……。

三人は復讐の物語を創造していく。
生きる意味と存在の答えを求めながら、
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。

復讐という名の物語を創っていく。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第二章　―4　対峙

静かな足音のみが聞こえる。
時々、天井から滴が落ち、薄暗い鍾乳洞に静かに響く。
結界トラップにはまらないように気をつけながら、ゆっくりとキリアたちは歩いて行く。
壁に立てられている松明が揺れる度、影が不気味に蠢く。
「足場がほぼ無いな」
「そりゃあ、ひっかかるように仕組んでるんだから」
「でも、なんで完璧にしきつめてないのかな？」
クレアの質問に簡潔にリーフが答える。
「ここの管理者。警備兵（ディリング）が出入りできるように、でしょ？」
「あ！　そっか」
クレアはにっこり笑い、相槌を打つ。

長い間歩いたおかげでかなり奥に入ってきた。
風が薄くなり、声がより響くようになってきた。
結界トラップもさっきより簡単に避けれるようになってきている。
と、矢先に光り輝く何かをキリアたちは見つける。
目がくらやむほどの明るさではないが、きれいなのは確かであり、少しの間見とれてしまう。
「きれい……」
クレアは小さく呟く。
「結晶石だ……」
「あれが……？」

光を見つめながら、キリアは歩を進める。
それにリーフとクレアが続く。
光に近づき、キリアはそっと、その光に触れた。
瞬間。
光は消え去り、薄橙の結晶が顔を出した。
それは地面から根強く繁茂していた。
キリアは、手にかすかな力を加える。
すると、簡単に結晶は折れ、手のひらに収まる大きさの結晶石をキリアは手にする。
「これで……。　！！」
キリアは途中で言葉を止め、後ろを振り返る。
だが、後ろにはいきなりキリアが振り向いた事にびっくりしているリーフとクレアしかいない。
が、その見つめる先には、なにかの気配がある。
そうキリアは感じていた。
「どしたの？　キリアお兄ちゃん？」
「静かにしろ！」
どうやら、クレアとリーフは気配に気づいていないらしい。
キリアは辺りを見わたし、隠れられそうな岩影を見つける。
「あそこに隠れろ！」
キリアは指差しながら岩陰に走る。
リーフとクレアも分からないまま、キリアと一緒に隠れる。
仮にその気配が警備兵（ディリング）だとしたらそれはそれでかなり厄介なことになる。
不法侵入。覚醒犯罪者（覚醒能力を使って悪さをした者の事）のリーフ。
ほんとに厄介なことになる。
キリアたちは息を殺し、近づく気配がくるであろう大広間の入り口を見る。

そこに入ってきたのは……。
黒色のマントを羽織った一人の男だった。
瞬間。
キリアの体が一瞬動く。
不振に思ったリーフがキリアの顔を覗き込むと……。
そこには、殺気に満ちた目をした険しい表情が浮かんでいた。

おかしい。
そう頭が警告する。
さきほどから歩いてきた道はすべて‘無’。
魔法の類は感じ取れなかった。
幼い警備兵（ディリング）は前を行く二つの灯火。
覚醒集団（アブノーマル）の二人を追っていた。
すでに覚醒集団（アブノーマル）があの旅人もどきだということに気がついている。
すれ違ったときから。
だが、自分一人では……否、警備兵（ディリング）では覚醒集団（アブノーマル）を倒せないのは分かりきっていた。
だから、後をつけ、何を企みこの大都市に足を踏み入れたのかを調べ、それを消し去る。
そのための尾行だった。
だが、やつらがおかしな行動を取った場所をいくら探ってもなにも出てこない。
おかしすぎた。
自分は、あいつらの手のひらで転がっているのではないか？

このまま引き下がってしまったほうがいいか??
頭によぎる警告。
それを、過去の惨状が破り去る。
(そうだ……私は……やっと掴めたんだ……あいつの手がかりを!!)
幼い警備兵(ディリング)は長い金髪に隠れた右目を抑える。
いまや、自分の目ではない目を抑える。
空いているもうひとつの手をひざに装着している魔弾銃(まだんじゅう)にかける。
周りの人など関係ない。
今は、奴の手がかりが最優先。
人を守るべき警備兵(ディリング)あるまじき思考。
だが、今の自分には関係ない。
銃口をこの先にいるはずの覚醒集団(アブノーマル)に向ける。
引き金に手をかけた瞬間。
一瞬。魔法の発動を感じる。
だが、それも一瞬にして消える。
戸惑った矢先。
幼い警備兵(ディリング)の足元に魔法陣が浮かび、それを支点にするように幾つもの魔法陣が幼い警備兵(ディリング)を取り囲む。
「空間転移魔法(ニフレ)!? そんな……!」
言葉も言い切れぬまま、幼い警備兵(ディリング)は姿を消した。

「クレイモア!!!」
大声を張り上げ、キリアは岩陰を飛び出し、一直線にクレイモアと呼ばれた黒色のマントを羽織る男に駆ける。
刀を鞘から引き抜き、刃を返し、クレイモアに振り下ろす。

キンッ！！！
甲高い金属音が弾ける。
キリアの刀はクレイモアの顔面から５０ｃｍほどで止まっている。
火花を散らしながら。
「くそ……」
「こんな所で会うとはな……キリア……」
クレイモアが右手を横に振るとキリアの刀も動きに流され、弾かれる。
すぐに体制を立て戻し、クレイモアと距離を取る。
「クレイモア……！」
「そう怖い顔をするな。　なにを怒っている？」
「っだと！！」
もう一度、クレイモアに刀を振る。
だが、またしても金属音を奏で、止められる。
「双竜‘不知火’か……」
「覚えていたか……光栄だ」
そう。
キリアの刀を止めているのは、魔法でも結界でもない。
刀である。
だが、クレイモアの持つ相竜‘不知火’は刀が見えない。
刀身……否、柄さえも見えず、ただそこに存在する。
最凶の刀の片割れである。
「てめぇ……」
「ふ……。　怒った顔をみるのは3年ぶりだな」
「黙れ！！！」
キリアは刀を大きく振り切る。
そのまま回転。
もう一撃をクレイモアに浴びせようとする。
が、また止められる。
「まだ引きずっているのか……？　キリアよ」

「うるさい！！」
また振り切る。
今度は距離を取り、体制を整える。
キリアには冷静さの欠片もない。
「そんな戦い方を教えた覚えはないぞ」
「だまれぇぇぇ！！！」
キリアはまた飛び出す。

復讐の対象である男に向かって。

三人は復讐の物語を創造していく。
生きる意味と存在の答えを求めながら、
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。

復讐という名の物語を創っていく。

ｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃ

第二章　―5　対決、偽りの心

刃が交じり、火花を散らす。
一見、同等の戦いに見えるが、実の所クレイモアは一歩も動いていない。
それどころか、攻撃すらしていないのだ。
全て、防御に回りキリアの斬撃を止めるだけ。
明らかにキリアが劣っていた。
「どうした？　そんな物か？」
「……くそ」
キリアは刃を切り払い、体勢を立て直す為にまた距離を取る。
瞬間。
クレイモアが地面を蹴り、一気にキリアに近づいた。
不意をつかれたキリアはどうすることも出来ず、刀をただ自分と水平に立てるだけ。
その刀をかいくぐったクレイモアの蹴りがキリアの横腹に命中する。
「ぐっ……」
よろめいたときを逃さずクレイモアは体勢を崩したキリアに追撃。
見えない鋭い刃を誇る相竜，不知火，の峰をキリアの腹に叩き込む。
振り切られた刀にキリアは抵抗なく飛ばされ、土の壁に激突。
吐血を漏らす。
「……がは……はぁはぁ」

キリアは両手と両膝をつき、口から血を全て吐き出す。
その光景を見ながら、クレイモアはキリアに近づきながら話す。
「その程度か……。呆れたな」
「はぁはぁはぁ」
クレイモアは動きを止める。
その動きを見逃さず、クレアは岩陰から飛び出し言い放つ。
「衝撃閃光（エリクサ）！！」
右手の人差し指から放たれた閃光は動きを止めたクレイモアに一直線に向かう。
が、クレイモアはその閃光に対し、不知火を振り、真っ二つに切り裂き、上下に分散させた。
「え……？」
「……お前は……！」
クレイモアは一瞬目を見開かせてから、すぐにクレアに近づく。
魔法か否か、地面を蹴って進む速さは常人とはかけ離れていた。
その速さに、今まで常人であったクレアは対処できず、クレイモアに首根っこを掴まれる。
「ううっ……！」
締め上げたまま持ち上げる。
クレアは嗚咽を漏らしながら、自分の首を掴んでいるクレイモアの手首を両手で掴み、足をばたつかせる。
だが、振りほどける訳もなく。
「……貴様は……もしやクレア・パトラディッシュか？」
え？　と声に出したいが出せないクレアは目を見開く。
その反応を見たクレイモアはクレアの首から手を離す。
その瞬間。
魔法陣が現れ、黄金の結界が地面に倒れたクレアを守るようにドーム状に展開される。
それを見たクレイモアはすぐに地面を蹴り、今居た場所から遠のく。

その半秒後。
さきほどまでクレイモアが居た場所に魔法陣が組まれ、魔法が発動していた。
「まだ、いるのか」
クレイモアが周りを見渡そうと首を横に振った瞬間。
目の前にキリアが現れる。
それと同時に迫る刀。
キリアのいきなりの現れに、不知火での反応が遅れ、本能のみで体を横にずらし避ける。
「くそっ」
勢いに乗ったキリアの攻撃が空を切り、体が先進したのをクレイモアは見逃さず、すかさずカウンターの膝打ちが腹に入る。
宙に浮いたキリアにクレイモアは一回転のまわし蹴りを入れる。
また、飛ばされ今度は地面に激突。
受身も取れず、うつぶせになる。
「くそっ……」
クレイモアは第三者、つまりリーフからの魔法陣に気を配りながら、歩を進め結晶石に触れる。
手の平サイズに割れた結晶石を懐に沈め、出口へ歩き出す。
その後ろから、気配を魔法陣で消したリーフが走りこみ、クレイモアの背中に向かい、ナイフを切り下ろそうとした瞬間、クレイモアの姿が消える。
「まさか……瞬間歩法（テリュード）！？」
「その通りだ」
背後からの声に反応し、リーフが後ろに振り向く前に首筋に強烈なひじ打ちが入る。
そのままうつぶせに倒れこみ、体の神経が麻痺する。
「ふん……。まだまだだな。それでも俺直属の部下か？？」
「……黙れ……」
小さなキリアの声にクレイモアはため息を漏らし、出口に向いた。

「クレア・パトラディッシュに出会えたのか……。それでも、お前は記憶が戻らないのだな。哀れな……。やはり、俺が力を貸さなければならないか？　キリア・パトラディッシュ」

クレイモアの小さなつぶやきはキリアたちには届かない。
ただ、足元に倒れる少年を除いては……。

三人は復讐の物語を創造していく。
生きる意味と存在の答えを求めながら、
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。

復讐という名の物語を創っていく。

To Be Continued

プロローグ&第三章（前書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした。

楽しみに待っていた人。

すいません。

プロローグ&第三章

「魔力の流れが……乱れている」
「確かにな……なんの魔法だ？」
「読めない……禁詩（きんし）の可能性が高い」
「ということは……覚醒集団（アブノーマル）か……」
「次は何をたくらんでいる？」
男たちはベルフェリングを見下ろせる高台の上で話していた。
一人は旅人装束に白の布をマフラーみたいに首に巻いている。
もうひとりは茶色のフードをかぶり、下は黒の革ズボンという貧相な服装をしていた。
この二人は魔力の流れ、つまり大気を観測する警備兵情報隊（ディリング インフォテスト）の隊員である。
警備兵捜査隊（ディリング インケステント）と同じ立場にあり、同じ機関に所属する警備兵（ディリング）随一の能力者が揃う場所。
そのうちの二人が彼らである。
白い布の男は腰に付けてある警備兵（ディリング）常備の剣を地面に突き刺し、その場に魔法陣を展開させる。
その魔法陣の中にもう一人のフードを被った男が入り、重なるように魔法陣を展開させる。
違う色、違う波紋の魔法陣が急速に回り始め、中にいるフードを被った男に取り巻くようになぞの文字列が浮かび上がる。
弔詞魔法（ちょうしまほう）。
浮かんだ文字列を暗唱することにより、通常よりも強力な魔法、もしくは魔法陣が展開できる。

フードを被った男は浮かんだ文字列を読み進める。
白い布を巻いた男は魔法陣の展開に集中している。
背後から忍び寄る影に気づいていない。
高台から見えるベルフェリングは全体図をきれいに見せてくれる。
そして、魔力の乱れがどこから発生させられているのかは一目瞭然だった。

そう――。
ベルフェリングの各部分でそれは引き起こされていた。
その問題を解決するためにも、状態、魔法か否か、構造。
全てを把握し、確かな判断を下さなければならない。
その為の魔法陣展開、そして弔詞魔法の使用理由だった。
「！！？」
フードの男がピクリと反応する。
「どうした？？」
白い布を巻いた男が問いかける。
フードを被った男は眉をしかめ、弔詞を読む。
が、途中でやめ、白い布の男に振り向く。
「だめだ……。察知できない。多分、因果孤立だ！　厄介な……もっと近づかなければ分からない」
「そうか」
魔法陣を収縮させ、かき消す。
白い布の男が剣を手に取り、鞘に戻し、振り向いた瞬間。
目の前に一匹の黒い蝶が舞った。
つい、その黒い蝶に二人は見とれてしまう。

そして……。

「さようなら……。あなたは私の手の中よ」
女の声が響き、地面に黒色で構成された魔法の蜘蛛の巣が広がる。
それは男達の足に絡みつき、動きを制限。そして……。
「儚く消えるのよ……私に食べられて」
女の声と共に二人の男は叫び声を上げる。
数秒もせぬまま、二人はいなくなり、ただ着てきた服のみが残った。
「……まずまずね。1つ星ってとこ」
黒い羽が舞い散り、その場に黒い着物を着た女性が現れる。
黒い着物には赤色で蝶が描かれてあり、顔は化粧で作っている。
大人の上品さをかもし出していた。
空を舞った蝶は女性の下に降り立ち、フッと音無く消えた。
女性は手に持っている一枚の透明な破片を投げ捨てた。
それはもう誰も着ていない服の上に落ちる。
「……返しといてあげる……供養ぐらいはされたいでしょ？」
投げ捨てた薄い一枚の破片は、紛れも無く、白い布を巻いた男の爪だった。

俺は負けたのか……。
あいつを殺せなかったのか……。
失敗したのか……。
俺は……弱い……。

「キリアお兄ちゃん！」
「……！　クレア……？」
気を失っていたキリアは身を起こす。
横腹に激痛がはしるが、耐え抜き立ち上がる。
クレアは心配そうにキリアの姿をまじまじ見つめた。
見ため的には外傷は見れない。
だが、キリアの耐える顔がクレアは心配でたまらなかった。
いつも無表情。無愛想。
そのキリアの表情が変わっている。
それだけで、クレアは怖かったのだ。
「……クレイモアは……」
「帰って行ったよ」
「……そうか……」
キリアは嘆息し、周りを見渡す。
ずり向けてへっこんでいる岩の壁。
地面に残る戦闘の後。
そして、遠くで顎に手を添えて悩んでいるリーフ。
「あいつは何してるんだ？」
「わからない……なにか考えてるみたいだけど……教えてくれなくて」
涙目でクレアは告げた。
なぜ涙目？　とキリアは首をかしげたが、すぐに元に戻しその場で立ち上がった。
こうしてはいられない。
まだクレイモアはそばにいる。
そういう気持ちはキリアを焦らすばかり。
だが、そのキリアの足をクレアはつかんだ。
「なんだ？」
「行く気……なんでしょ？」
キリアは押し黙り、掴まれてない足を前に踏み出す。

「ダメ！！！」
「……」
黙ったままつかまれた手を強引に解く。
クレアは再度つかもうと試みるが、キリアの背中から発せられる無言の圧力に手を引く。
キリアは足を止めることなく、床に刺さった刀を引き抜き、出口に向かう。
が、その行き先をリーフは遮った。
「……なんのつもりだ？」
「行かせねぇって言ってんだ」
「邪魔をするのか？」
キリアが抜き身の刀の頭を上げ始める。
リーフはそれを見て、すかさずナイフを構える。
「俺を……殺る気かよ？　キリア」
「邪魔をするなら、切らしてもらう」
刀の切っ先がリーフに向けられる。
硬直する空気。
風が吹いたわけではない。
が、風が通り過ぎたと圧覚するほど、微動だにしない二人。
瞬間。
大きな金切り音が空気を揺るがした。
キーンと鼓膜を直線で刺激する。
洞窟内にいる三人は耳に響く金切り音に顔を歪める。

――解せぬ……。

金切り音にまぎれて声が響く。

――仲間割れか……。我の神聖な場所で騒ぎよって……

声と金切り音が絶え間なく響き、その中、結晶石の前に一人の女性が現れる。

その姿は平安時代に出てくるような十二単を身にまとい、上品な貴族としか言いようのないオーラを放っている。

「誰……だ??」

金切り音に絶えながら、ぎりぎり出したキリアの問いに女性は言葉ではなく、念力のような言葉を送る。

――我は世界を造り、人間を想像した創造神の片割れ……、吸血姫、

吸血姫と名乗る女性の声に耳を貸す三人。

それが、新たな物語を書き記すための一ページ目だとは、知る由も無く……。

三人は復讐の物語を創造していく。

生きる意味と存在の答えを求めながら、

繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。

復讐という名の物語を創っていく。

To Be Continued

第三章　―1　吸血姫

時が止まっているのか。
天井から滴る水滴は空中で動きを止め、また、落ちた水滴によって波紋を作る水溜りも停止している。
だが、キリア達はそんな事に気は向けず、否、向けれず一人の女性を見ていた。
発せられる金切り音と声。そして‘吸血姫’と名乗った女性の正体に動きを止めてしまっていた。

吸血姫。
太古の昔、世界を創造した想像神がいた。それが‘堕天使’と‘吸血姫’。‘堕天使’は生命を、‘吸血姫’は絶命を象徴とし世界のバランスを保ってきた。
数千年…いや、数億年の年月を二つの神が保ってきたのだ。
その時、ひとつの例外が起きた。
‘堕天使’の消滅。
原因不明の消滅事件により、世界に生命の象徴は無くなり、ひたすら絶命へと歩いていくことになってしまった。
その時に起こった世界の異変……それが‘吸血鬼病（ルジュ）’。
世界に感知できない病原菌が舞い散り、世界を覆いつくし、世界を絶命に追いやった。
その時に動いた組織。それが今や覚醒集団（アブノーマル）と呼ばれている覚醒組織集団。‘超能力研究科’である。

その頃、‘超能力研究科’は警備兵（ディリング）の機関のひとつであった。
唯一、‘吸血鬼（ルジュ）病’対抗の試薬を開発。成功させワクチンを作り上げた。
それにより救われた人間は数え切れないほど。世界は絶命を食い止めることができた。
だが、所詮は食い止めた程度である。‘吸血姫’の異常行動をなんとかしなくてはまた同じことの繰り返しとなる。
そして、‘超能力研究科’は動き出したのだ。
覚醒能力をさらに解放できる薬品‘ＰＬＳ’を。
それを持ちいり、‘吸血鬼’消滅に乗り出した。
姿を現した‘吸血姫’を相手にそれなりに健闘はした。
が、神に人間が勝てるはずが無かった。
幾人もの味方が倒れ、魔力も残っているはずなく……。やはり、神に抗うのは間違っている事なのか、戦った者たちは落胆した。
だが諦めず戦う意思を示した男がいた。‘超能力研究科’の長だった。
その男が取った最後の方法。それが……。

‘吸血姫’の封印。
消滅までとはいかないが力を封じ、世界に干渉させないようにする。それにより絶命の象徴をなくさせ世界を安定させる。
最後の手段だった。
その封印魔法は禁詩と呼ばれる禁じられた魔法。数人の命と引き換えに目標を世界から孤立させ封印する。
その手段を取ったのだ。
よって世界は救われ、安定がもたらされたのだ。

しかし、‘超能力研究科’の行った方法は禁じられた物。
いかに世界を救った機関でもそれが見逃されることはなかった。
刑の執行。なんて理不尽なのだと嘆いた者の言葉も聞き入れず、

‘超能力研究科’は廃棄。
研究員の警備兵（ディリング）身分証明書剥奪。
‘超能力研究科’という機関は警備兵（ディリング）機関から無くなった。

そんな過去がある‘吸血姫’
それを前に平然としていられるわけが無かった。

――もしや……お主らが奴の言っていた生贄か？　しかし奴は二人と言っていたんだが……はて……聞き違いだろうか……。

「生贄……？」
キリアは疑問を言葉に吐く。
‘吸血姫’は手を顎にやり、頭を傾けている。
そんな仕草さえも、キリア達を刺激する。それほど、恐ろしい生き物なのだ。

――その様子だと違うのであろうな……では、立ち去れ……。我の場で暴れようとは許さん。先ほどまで我慢していたが、もう限界じゃ。今すぐ立ち去れ。

強烈な睨みを効かせる。
その圧力にキリア達は数歩後ずさる。キリアの頬に汗が一線流れた。
震える手が止まらない。
本能的に警告。
キリアは目を見開き、刀を地面に刺すことで体勢を保つ。

――なんだ？　立ち去らぬのか？　ならば……我が手にかけるしかないか。

瞬間、迸る殺気。

キリアは刀から手を離してしまい、後ろに尻もちをつく様子で倒れる。

クレアは、その場に崩れ落ち、声を出すことなく涙を流す。

リーフは息を荒くあげ、片ひざつく。

‘吸血姫’が場を支配していた。

‘吸血鬼’は深くため息をついた。

――情けないの……腰すらも抜かしてしもうたか……良い。　特別に我がお主らをこの場から消してくれようぞ。

‘吸血鬼’の放った言葉の意味を間違った形で解釈したキリア達はよろめきながら立ち上がり、‘吸血鬼’には背を向けず、歩いていく。

走ることなんて出来なかった。

体が……震えていた。

――なんだ……自分で歩けるのか……そう気にするな。　我は背後から不意打ちなどという下種な真似はせん。　前を向き、歩いていけ。

その言葉に歯向かい、根気強く目を離さずに歩くべきなのかもしれないが、キリア達は言われるがまま背を向け、歩きトラップに引っかからないように大広間を出た。

‘吸血鬼’は懐から扇子をひとつ取り出し、大きく広げ自分を仰ぐ。

その優雅な微笑みは、女王のように輝かしいものだった。

少女は走っていた。

大海原の見える路上を。

身にまとった服をたなびかせ、警備兵（ディリング）の証である紋章を煌かせ、走っていた。

すぐ傍に捜し求めていた奴がいる。

そいつが、今、自分達の町に何かをしようとしている。

それだけが心に渦巻いていた。

（孤立魔法にやられるなんて……迂闊だった。……今なら……まだ間に合う）

心中で自分を励まし、それでも自分に鞭を打ち、走った。

大都市ベルフェリングで大きな魔法の発動の予感が、少女の頭を巡っていた。

三人は復讐の物語を創造していく。

生きる意味と存在の答えを求めながら、

繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。

復讐という名の物語を創っていく。

To Be Continued

第三章　―2　再会と予兆

たどり着いた大都市は、いつもと変わらず喧騒に飲まれていた。
人々がパニックを起こしているわけでもない。
今までどおり、普通にこの道を歩いている。
なにも起こっていない……？
少女は不審がった。
少女を飛ばしてから、少女がここに到着するまでの時間は山ほどあった。
大魔法でも、弔詞魔法でも、どれでも時間はあったはず。なのに使われていない。
どういう意図が含まれているのか…少女には分からなかった。
（おかしい。なにが……）
その時――。

横を通り過ぎる三人の旅人。

一人は15、6才の青年。あとの二人は9才か10才の同い年くらいの少女と少年。
気になったのはそこじゃない。
その青年が持っているポーチの中身。
そこから発せられる不吉な魔力の気配。
「ちょっと止まって！！　そこの三人」

少女は叫ぶが、三人の旅人は気づかない。
少女はもう一度叫ぼうとするがやめ、走って青年の肩を掴む。
「待ってと言ってるでしょ」
「……なんだ？」
青年は怪訝な顔で振り向く。

「あなた……」
「……！　フィ、フィレスか！？」
「やっぱり！　キリアだ」

お互い驚き、大通りの真ん中で唖然とする。
あまりにも驚愕すぎたのだ。
「なんでお前が、いやそれはいい。今は急いでるんだ。またな」
踵を返し、歩いていく。
一緒に居た少女と少年、クレアとリーフは蚊帳の外。
黙って聞いてるのみだったので、キリアが歩き出したのに合わせ、歩き出す。
「待てって言ってるでしょ！」
「しつこいな」
「そのポーチの中身……何？」
その質問にキリアは険しい顔になる。
リーフやクレアもまさかの質問にビクッと上体を跳ね上げる。
キリアは悟られないように言う。
「俺の荷物だ。関係ないだろ？」
「答えなさい！　警備兵（ディリング）としての命令よ」
「なぜそこまでして聞きたがる。任意を示せ」
「結晶石の反応を感じる。特別な魔力の気配よ。だから見せろと言っているの」
的確な察知にキリアは歯を食いしばる。

結晶石を持っていることがバレれば、明らかに捕まってしまう。
かといって騒ぎを起こせば、違う警備兵（ディリング）も感づいてますますめんどくさくなる。
しかし、選択は二つに一つだった。
「キリア……どうするの？？」
リーフがか細く小さな声でキリアに聞く。
「逃げるしかないだろ」
それに小さく答える。
「あいては警備兵（ディリング）だよ？　逃げれるの？？」
クレアも話に加わる。
「だから……逃げるしかないと言っている」
「あ……警備兵（ディリング）のお姉さん、こっち見てるよ？」
「そりゃ、見るだろうな」
「どうするの？？　気を引かないと逃げれないでしょ？」
「確かにな……。リーフ……なんか話して来い」
「俺に人質になれってか！？」
「俺が行ったら意味がない。クレアは口下手だしな……」
「マジかよ…」
うなだれるリーフ。
キリアは最後に一声かける。
「お前だからできる事だ」
「よく言うよ……ったく」

しぶしぶリーフは歩き出し、警備兵（ディリング）の少女の下に行く。
一回ため息をついてから話しかけた。
「えと……俺はリーフ・クレイディアって言うんだ。君は…？」
「私はフィレス・クラウソンよ」
「クラウソン？　どっかで聞いた名前だな」
「きっと、クラウソン工房の事でしょ？」
フィレスは元気なく教えた。

「あぁ。多分それだと思う。どうしたの？　浮かない顔して…やっぱ関係してた？」
「えぇ……。私の父の工房なんだもん。まぁ、昔の話だけど」
フィレスはため息をついた。
クラウソン工房とは、この大都市ベルフェリングの町外れに位置する機械開発研究施設の事だった。
だが、今はただの廃棄物と化してしまっている。
数年前、覚醒集団（アブノーマル）の襲撃により崩壊している。
村荒らしの一環ともみられ、そう追求はされなかった。
無理に壊す必要性も見つからないため、そのまま放置され、置きっぱなし。
良いのか悪いのか、フィレスは心重かった。
「あ……悪い事きいたね」
リーフは同情しながらも、ちらりとキリア達を見る。
キリア達はタイミングを見計らってるらしく、まだ動いていない。
もう少し、粘る必要がある。
「ううん。気にしないで」
「えと……フィレス…さんはキリアとどんな関係？」
「え？　えっとね……」
フィレスが答えようと口を開けたその瞬間。

その場の四人は一瞬で察知した。
強力な魔法陣の展開の気配を。

（動いた……！！！　行かなくちゃ！）
フィレスはすぐに気配を感じる方に走り出す。
キリアは好機か否か走り出す。
目指す場所は情報屋の場所。魔法陣の展開は後で良い。
とりあえずは結晶石だった。
が、クレアがキリアに追いつき言い放った。

「嫌な感じがする。なにか起こるよ」
クレアの魔法察知がなにかに感づいている。
キリアは顔をしかめ、それでも歩を休めず情報屋の元に向かう。
このような大都市であんな巨大な気配を誇る魔法陣を展開するなど警備兵（ディリング）に見つけてくれと言っているもの。
それでもなお、それをする必要性。
キリアは思考をめぐらせるが全く分からない。
「キリアお兄ちゃん！　なにか……来るよ！！」
クレアが叫ぶ。
それに反応し、キリアは止まり気配をする方に向く。

感覚は、振り返った瞬間に来た。

思い重力に押し付けられるような、風に吸い取られるような鈍い感覚がキリア達を襲う。
クレアやリーフも苦しそうに顔をゆがめる。
だが、周りを歩いてる人たちは至って平常。
自分達だけか？　キリアはそう思う。
だが、歩く人の中にも苦しんでる人々は居た。
そう――警備兵（ディリング）達。

「ぐぅぅ……覚醒集団（アブノーマル）の仕業か……。見つけるのが遅かった」
警備兵（ディリング）の一人の言葉をキリアは逃さなかった。
覚醒集団（アブノーマル）が、この大都市にいる。
クレイモアの仲間が、大都市に。
その思考がキリアを走らせる。
「待って！　キリアお兄ちゃん！！」
「待てよ！！！　キリア！！」

自分の仲間の声は届かない。

復讐への野心が全てを見えなくしていた。
クレイモアの姿を思い描きながら、キリアは大都市の中心に魔法によって咲き誇る真っ白な純白の大きな花弁に向かって走った。

三人は復讐の物語を創造していく。
生きる意味と存在の答えを求めながら、
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。

復讐という名の物語を創っていく。

ontinued

To Be C

第三章　―3　境界眼（前書き）

知ってる人は知っている「直死の魔眼」と同じ能力みたいのが出てきています。

第三章　―3　境界眼

スレイディッシュは微笑みながら空を仰ぐ。
程度に雲があり、しっかり青い顔が出ている。
それを無駄に色づけるように薄紫の霧のようなものが飛んで、自分の近くに咲く大きな白い一輪の花に集まっている。
時間が経つにつれ花は輝いていく。
「やっぱり大都市でやって正解じゃない……。いっぱい魔力が集まってくる。次々に集まってくる……クスクスクスクス」
小さく笑う。
手に持つ漆黒色の大鎌は怪しく煌いている。
そこに光る真っ赤な鮮血。
近くに倒れる三人の死体のものだ。
その三人の服装の肩には警備兵（ディリング）の証といえる紋章がついている。
スレイディッシュは魔法陣の発動で感づき、止めに入ってきた警備兵（ディリング）を殺したのだ。
その死体が倒れる三人。
あまりにも呆気なかった事に不満があったスレイディッシュだったがこの後も違う警備兵（ディリング）が来る事もわかっていたため次やってくるやつ等に期待していた。
「随分きれいに咲くわね。そんなにここの魔力はおいしい？」
答えが返ってこない事を知っているがあえて問うてみる。
白い花はただ魔力を吸い取るのみだった。

「フフフ」
小さく微笑む。
それと同時に現れる複数の警備兵(ディリング)。
スレイディッシュは静かに唇を舐めた。

「めんどくさいな……」
スレイディッシュがいる花弁の逆側でレデントは愚痴を吐く。
でかい花弁なので今のスレイディッシュの行動は把握できない。
する事が出来るのは時々聞こえる刃物がかち合う音。
それはスレイディッシュが戦っている事を意味するからだ。
そして今まさに刃物がかち合う音が聞こえてきている。
「レイの奴遊んでやがるな……。全く……ほんとに人を殺すのが好きな奴だ……」
また愚痴を吐く。
それと共に警備兵(ディリング)が二人現れる。
「見つけたぞ！」
一人の警備兵(ディリング)が叫ぶ。
それと同時に二人はレデントに飛び込んでくる。
「面白くないな」
レデントは呟き、飛び込んでくる二人の警備兵(ディリング)の間を瞬間で駆け抜ける。
すれ違う形になったことにより戸惑う警備兵(ディリング)。
だが、戸惑うのもつかの間。
すぐに二人の警備兵(ディリング)の胸元から腰にかけて血が溢れる。
そのまま二人の警備兵は倒れこむ。
その様子をレデントは見つめ、言い放った。
「俺の‘眼’の前ではお前達なぞ紙に等しい」
自分が手にしていた大太刀を背中の鞘に戻す。

そしてまたその場にしゃがみこむ。
「なんか無いのか？」
楽しみを探す。
しかし、特に見つからず大きなため息を吐く。
「……暇だ……ん？？」
ふと、顔を上げる。
ちょうど前の方からこちらに全速力で近づくひとつの影がある。
太陽に照らされ、金色の髪がきれいに輝いている。
「新手か……。この感じ……さっきの奴等とは違うな」
特別な気配を感じたレデントは立ち上がり、早めに大太刀を抜く。
レデントに近づく影は次第に大きくなり、すぐ前に対峙する瞬間、金髪の警備兵（ディリング）は腰につけていた銀色の二丁拳銃を引き抜きレデントに向ける。
瞬間、放たれる形無き魔力の弾丸。
レデントは反射で横に避ける。
弾丸は途中で分散しそのまま掻き消える。
そこでやっと二人はまともに向き合える事が出来た。
「なかなかできるな。名はなんていう？　警備兵（ディリング）」
「フィレス・クラウソン」
「俺はレデント・エクローションだ」
しばらくの沈黙……。
どちらも静止して数秒。
先制を仕掛けたのはフィレスだった。
右手の拳銃から魔弾（まだん）を撃ちだす。それを避けるためにレデントは左に跳ぶ、がその跳ぶ先にはもうひとつの弾丸。
左手の拳銃から放たれた弾丸である。
瞬時に大太刀を構え、弾を両断する。
左右に分かれた弾は分散し、消える。それを確認したレデントがまばたき一つ付いたとき――。
すでに目の前からフィレスは消えていた。

（――速い！！）
すぐに視界を真上の上空に向ける。
そこには拳銃を二丁レデントに向けているフィレスの姿があった。
放たれる二発の弾丸。空中で身動きが取れないレデントは無理やり向きを変えるため大太刀を地面に突き刺し、それを支点に反転。方向を強制的に変える。
二発の弾は地面にぶつかり穴を開け分散する。
方向変え、地面に着地したレデントは大太刀を引き抜き、構える。
その様子を見たフィレスは左手の拳銃を腰に戻し、右手の拳銃の取っ手を引っ張る。
すると銃は変形を始め、取っ手が拳銃本体と水平に設置される形になる。
すると銃口からビーム状の剣が展開される。
そのまま急速落下。レデントに切り掛かる。
それをレデントは大太刀で受け止める。
「動きのキレが良いな。ただの警備兵（ディリング）じゃないな」
せばづり合いの中、レデントが口を開く。
「警備兵捜索部隊（ディリング イエーガー）第一分隊隊長だ」
「なるほど、隊長か」
レデントは口をニヤつかせる。
「ならば、本気で行ったほうが良い様だな」
言い終わると同時にレデントの右目が真っ赤に変わる。
「それは……！！！」
フィレスが唖然とし、下唇をかみ締める。
それと同時に剣の圧しも強くなる。
「なんだ？　『境界眼（きょうかいがん）』を見て焦ったか？」
「それは……それは……」
ふるふると震えだすフィレスの両手。
「なんだ？　恐怖で震えているのか？」
一瞬間を置き、大声でフィレスは言い放った。

「それは！　私の眼だぁぁぁぁ！！」
腰から左手の銃を引き抜き、レデントの顔面に向ける。
引き金を引く瞬間、レデントの姿が消える。
圧し合っていた相手が急に消える事になり、フィレスは体のバランスを崩しよろめく。
その背後にレデントが現れる。
「お前の眼？？　なるほど……前期のリーダーが言っていた『境界眼の器』って言うのは……お前の事だったんだな」
振り上げられる大太刀。
レデントが狙うのはフィレスの体に見える数本の細い線。
死と生の境界線である。
だが振り下ろした大太刀が捕らえたのは、細い刀だった。
「！！？」
すぐに大太刀を引き、レデントはその刀の持ち主とフィレスから距離を取る。
「また新手の警備兵（ディリング）か？」
そのレデントの問いに刀の持ち主は独り言のように答えた。

「復讐者だ」

三人は復讐の物語を創造していく。
生きる意味と存在の答えを求めながら、
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。
復讐という名の物語を創っていく。

Continued

To Be C

第三章　―４　復讐者？（前書き）

遅れて本当にすいませんでした。

第三章　―4　復讐者？

大きな花が咲く大都市の中心部。
常人には認識できない大魔法。認知できるのは覚醒者とそれなりに特訓された警備兵（ディリング）のみ。
だが、剣を交え血を流す姿が常人に認識できるかと聞かれたら認識できるに決まっている。
それゆえ今、大都市は大混乱の真っ只中にいた。
中心部から逃げるように人たちが波を作り道という道を走っていく。
その中で流れに逆らいながらリーフとクレアは走っていた。
離れないようにしっかり手を繋ぎ、人たちにぶつかり流されそうになりながらキリアの後を追っていた。
クレアは息が絶え絶えとなり足がおぼつかなくなっていた。
走っているというのもあるが、一番の問題は魔華花弁（ピニオン）による魔法吸収にあった。
覚醒者であるクレアは魔華花弁（ピニオン）の吸収を受ける。
そして覚醒してあまり時間が経っていない事から魔力も普通の覚醒者よりも極端に少ない。
それがここまでの疲労を与えていた。
「大丈夫かよ」
「……うん……大丈夫」
その時、すれ違う男に肩をぶつけるクレア。それを耐えれず倒れこむ。
それを感じたリーフはクレアに近寄り、体を抱き上げた。

「う……重てぇ……」
「……そういうこと言わないでよ」
「悪い」
また人の濁流に飲まれないように走り始める。
大きな花は目の前に迫っていた。

「次から次へと……」
ぼさっとぼやくレデント。
その目の先には倒れこむフィレスとそれを助けた「復讐者」と名乗った男。
男が持つ刀は長年の戦いを記したように傷が多数ついている。
フィレスは男に向かっていった。
「ありがとう。でも……一体誰なの？　私はあなたのことを知らない……。警備兵（ディリング）ではないのね」
「あぁ。俺は復讐者だからな」
さっきまでの真剣な顔つきはどこかに行き、にっこりとした顔で答えた。
明らか過ぎるギャップにフィレスは唖然としながら答える。
「一体どういうこと？　なんで……」
「ちょっと覚醒集団（アブノーマル）にむかつく奴がいてね♪　そいつを殺したいって思ってるわけ。で、今回ちょうどよく覚醒集団（アブノーマル）が現れたから聞きにきたら、あら？　誰かやられてるじゃんって訳で助けた。わかった？」
「……うん。なんとなく」
軽いノリで話す男にフィレスは頬を引きつらせる。
あまりにも違いすぎる。
戦いに長ける人物というのは人を多く殺す事から『感情を失くす』

タイプと「感情が狂う」タイプに分かれる。
それは精神的に負けてしまう事からある。
それに負けないように精神を鍛えるとそのうち『感情を忘れる』ようになり『感情を失くす』タイプになる。
まだフィレスはそこまで人を殺したことは無い。
だから自分をしっかり保ち、感情に異常がない。
だが、この男からは幾つ物戦いを乗り切ったオーラが感じられていた。
明らかなほどの戦闘経験の差。レデントと並ぶほどの威圧のプレッシャー。
今までの戦いが物語っている。
「さて……じゃあ聞きますかね」
男はレデントの方を向く。
その顔はもうあのにっこりとした顔ではなかった。
レデントはその顔を見ると大太刀を大きく構える。
明らかに男のオーラはさっきまでと違っていた。
傍にいるだけでフィレスは感じていた。
恐ろしい殺気と圧力。
幾人もの人を殺してきた実力の差。
それが今、大きな波動のようにフィレスに襲い掛かった。
(この男……一体……)
額から流れる汗を拭い、フィレスは二丁拳銃を構える。
その行動に男は話す。
「邪魔をするな……。ひっこんでろ」
その言葉でフィレスの体は硬直。
腕から力が抜け、二丁拳銃を持った手が下がった。
(なんだろう、……この……感覚)
恐怖……とはかけ離れている。
だが体は硬直して体が小刻みに震える。
ふぅ……とため息を吐き、フィレスは大きく後退した。

「全く、物騒だなぁ」
「なんだ？」
男のいきなりの発言にレデントは怪訝な顔をする。
刀を地面に突き刺し、手を挙げる。
あまりに唐突過ぎる。
レデントは強く警戒を怠らない。
「こんな魔法は物騒だって言ってるんだ。このままだと全然力のない覚醒者が死んでしまう。この都市に数人くらいの気配を感じた。今、一人こちらに向かってきているみたいだけど」
その言葉にフィレスはハっとする。
キリアのそばにいた二人の少年少女。その一方の少年はそこまで弱い魔力の気配はしなかった。だが、もう一方の少女は……。
「知ったことじゃないさ。元々、この魔華花弁（ピニオン）の使用は俺が提案したことじゃない」
「ん？　ということは他に同行者がいるって事か？　おかしいな？　全然気配を感じないんだけど」
男の言葉にフッ……と鼻でレデントは笑い返す。
「そりゃあ、お前らごときじゃスレイディッシュの気配には築かないだろうよ。まぁ、実際あいつの姿を見ないと俺だって感じにくいし」
「なるほどね……」
男はその言葉を聞いて少し溜息をつく。
頭を下に垂らしながら、地面に突き刺した刀を抜きとる。
「じゃあ、ルナはいないんだな」
「……」
男の問いかけにレデントは答えない。
だが、男はそれを肯定と判断し……。
刀を構えた。

「いらっしゃい……今度は楽しませてくれるのかな？」
「答えろ……」
大鎌を構える少女は笑みを浮かべながら、駆け付けた青年を見据える。
「クレイモアはどこにいる！？」
「私を楽しませてくれたら教えてあげるよ。お兄さん？」

三人は復讐の物語を創造していく。
生きる意味と存在の答えを求めながら、
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。
復讐という名の物語を創っていく。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第三章　―5　特殊覚醒者

キリアは刀を構えて、スレイディッシュを睨みつけた。
不敵な笑みを浮かべたまま動かない少女にキリアはもう一度、叫んだ。
「クレイモアの居場所を答えろ！」
だが、その質問にスレイディッシュはクスクスと小さく笑い、返事をすることはなかった。その代わりにスレイディッシュの身の丈以上の血が付着した漆黒の大鎌を持ち上げた。空高く持ち上げられた鎌は色あせた太陽に照らされ不気味に光る。
そして鎌をゆっくりゆっくり回しながら下に下ろしていく。その鎌の刃の先が地面に突き刺さった瞬間――。
「広がれぇ！」
スレイディッシュが叫んだ。それと共に地面に展開される此処等一帯に広がった赤紫の魔法陣。だが、その魔法陣からは魔法の発動を感じない。この魔法陣が一体なんなのか、キリアは察せれなかった。
このまま、動かずに相手を出方を見るのは危険と感じたキリアは刀を右手にスレイディッシュに向かって走った。スレイディッシュは鎌を地面から引き抜くと、向かってくるキリアに向かって大きく右から左に旋回しながら鎌を振る。その横なぎの攻撃のモーションを最初の動きで察知したキリアは鎌の攻撃範囲に入る手前で右に跳ぶ。鎌を振り切ったスレイディッシュのガラ空きの右わき腹に向かって刀を切りつけようと更にキリアは距離を詰める。
だが、スレイディッシュは振り切ってすぐに逆に体を旋回させる。

鋭い刃先が突っ込むキリアの側面に急速に近づき――それを視界の先に捉えたキリアは上に高く飛び上がる。
また空振りしたスレイディッシュの体はバランスを崩すように一歩、右にずれる。
その隙を見計らったような上空からのキリアの切り落としがスレイディッシュを襲う。その斬撃は的確にスレイディッシュの頭を捉え、その顔をまっぷたつに切り裂く。
飛び散る血飛沫に目を細めるキリア。崩れ落ちていくスレイディッシュの体を見届けるように刀を下げる。
「この程度か……覚醒集団（アブノーマル）もそこまで強くなかったようだな」
そう吐き捨てる。
「くそ……。殺してしまったらクレイモアの居場所が聞けないじゃないか……」
そう言って、刀を持っていない左手で頭を掻く。
そして視界の右から迫る鎌の刃先を捉え――
「なっ！？」
咄嗟に体を左方向に倒す。ギリギリ頬をかすめる程度で鎌を躱（かわ）す。そのまま受身で左回り、背後に振り向く。
そこには5メートル弱離れた場所にスレイディッシュが立っていた。鎌は乱回転しながらスレイディッシュに向かい、その取っ手をしっかりと受け止める。
「あはははは。今ので私を倒したと思ったの？　あんなので倒せるわけないじゃん」
スレイディッシュは鎌を持ちながら腹を抱えて笑い出す。あの状態でどうやって回避した？　それがキリアの頭に渦巻く。
確かに頭を切り裂く感覚はあった。そう思いながらさっきスレイディッシュを切り捨てた背後に振り向くと、目の前に大鎌を構えたスレイディッシュが――
「くそぉ！」
キリアは戸惑いながらも左から右に振り下ろされる鎌を左に飛ぶ

ことでよけ、すぐに敵を目視する。
そこで、キリアは唖然とし、小さくつぶやいた。
「なんだと……なぜ……二人に」
「うふふふ」
「これが私の能力」
「私は特殊覚醒者（エクストラ）」
「‘影月（イクリプス）’」
二人に分裂したスレイディッシュが言葉を遊ばせながら言った。
「特殊覚醒者（エクストラ）だと……？」
キリアは歯ぎしりを行なった後、一気に飛び退く。特殊覚醒者（エクストラ）が相手だとは微塵も思っていなかったためである。

特殊覚醒者（エクストラ）はほんとに稀に見る覚醒者の特殊開放型だ。
覚醒者にならずにそのまま特殊覚醒者（エクストラ）になるものもいれば覚醒者から進化するものもいる。その特質は他の覚醒者を遥かに超越する力を秘めている。
大きな変化は二つ。
一つは他には真似できない特殊能力が身につけられること。
普通の覚醒者のように決められた詠唱をし、決められた魔法を使うのではなく、自分だけの独自で持つ特殊な魔法や力を使える。それはもちろん、普通の覚醒者では覚えることはできないし、発動もできない。そしてその力や能力は絶大な魔法力を所持している。故に、その能力は使用者の完璧な力となって顕現する。
二つ目は、膨大な戦闘能力、経験の蓄積である。
なぜかは解明されていないが特殊覚醒者（エクストラ）になった者は戦闘経験が無くとも覚醒と共に体や脳に蓄積される膨大な経験値により戦う達人をも凌駕する戦闘力を手にする。
これほど大きな力を持つ存在はほぼこの世界にはおらず、見つけることはかなり困難とされている。

その特殊覚醒者（エクストラ）と今、対峙している。
キリアは少なからず恐れていた。
「さぁ」
「二回戦」
「「始めるよぉ！！」」
二人のスレイディッシュが叫ぶと、二人キリアに向かって飛び出した。

大都市ベルフェリングの中心よりやや離れた街道でリーフは必死に叫んでいた。
「クレア！　しっかりしろよ！」
「はぁはぁ……」
苦しそうに息をするクレアにリーフは声をかけることしかできない。リーフの覚醒能力には治癒の覚醒能力が無い。そのため苦しんでおるクレアを回復する術がないのだ。
魔力を極限に吸い取られたクレアは生命の維持ができなくなってきていた。魔力吸収を止めない限り、クレアが死ぬことを免れることは出来ない。
「クレア！！　頑張れよ！！」
「はぁはぁ」
どうしたらいいかわからないリーフは必死に叫んび、助けを求めた。
「キリア！！　早く帰ってこいよ！！！」
その悲痛の叫びは魔華花弁（ピニオン）まで届くだろうか……。

三人は復讐の物語を創造していく。
生きる意味と存在の答えを求めながら、
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。

復讐という名の物語を創っていく。

To Be Continued

第三章　―6　次の一撃が……

「クレア！！　クレア！」
リーフの叫び声は動かなくなったクレアには届かない。ピクリとも反応しないクレアはリーフの腕の中で崩れ落ちていた。そんなリーフもさすがに息が上がってきていた。魔力が吸い取られ、体が重たくなってきていたからだ。自分もこのままクレアのようになるのか、そう思った頭をリーフはブンブンと左右に振った。
「俺が諦めてどうする！」
自分に言って聞かせる。クレアを抱きしめながら立ち上がることはできる事はできるが、歩くとなると流石に厳しい。体が思うように動かないのに、抱きかかえるなどどうしてもできなかった。
だが、このままここで座っていても誰かが助けてくれる可能性は少ない。騒ぎが収まらない以上ここに一般人はこないし、警備兵（ディリング）が緊急事態に街道で倒れる二人を助けるなどほぼ有り得ないからだ。
キリアやフィレスが帰ってくるというのも考えられるが、キリアはクレイモアの事で頭に血が昇り、冷静にクレア達の心配……などと言う事は考えない。フィレスは個人として知り合いとはいえ、そこまで深いわけではない。どちらかと言えば浅い。そんな間柄なら警備兵（ディリング）として行動するに決まっている。
どのみち、可能性はない。
リーフ自身が行動することが一番の打開策であり、クレアを救う道しるべになるのだが、それもかなわない。完璧な八方塞がり。打つ手がなかった。

「落ち着け……はぁ……」
大きく深呼吸をする。
だが、魔力吸収により息は上がったままだ。もちろん、まともな考えも浮かばない。
その間にもクレアの命は縮んでいく。
若干苦しそうな表情のまま気を失っているクレアからリーフは視線を上げた。
見上げた先には純白の大きな花が咲いている。魔華花弁（ピニオン）だ。そのそばできっとキリアは戦っている。そっと視線を下げ、リーフはクレアはより一層抱きしめる。
「行くぞ……クレア……行くぞ……俺！！」
足に力を入れ、クレアを抱きかかえたまま立ち上がる。キリアの下に向かっても、きっと足でまといになるだけだ。だから、リーフは崩れ落ちそうに笑う膝を必死に動かし、ベルフェリングの外に向けて足先を向けた。

「くそ……うごけよぉ！」
上がらない自分の足に向かってリーフは叫んだ。クレアが倒れた場所からおよそ百メートル移動した街道。そこでリーフの足は限界を告げ、崩れ落ちてしまったのだ。
リーフは息絶えだえでクレアを落としそうになるほど意識も飛びかけていた。視界がぼやけ、クレアを抱きしめている感覚ももはや掴むのが難しい。
いくらかなり前から覚醒者になっていると言ってもまだ魔力の所持が少ないリーフにはクレアほどじゃなくても絶対的にダメージを与える。‘死’という概念がリーフにまとわりつく。
「やっと見つけた……家族なのに……」
リーフはぼやける視界の中、クレアの顔を見つめる。苦しく歪められた顔を見るとさらに視界がぼやけ始め、その瞳から一筋の涙がリーフの頬を伝った。

自分の妹……昔生き別れた……その前の笑い合っていた頃の妹の姿とクレアは重なるところをリーフは感じていたのだ。無邪気に笑い、はしゃぎ、自分に話しかけてくれる無垢な姿。そこがどうしても妹と重なってしまっていた。

このままクレアと共に息絶えるなら……浮かんだ考えにリーフは激しく頭を振った。だめだ！　俺はクレアを救わないと！　その言葉を頭に響かせる。

だが、考えれば考えるほどこの状態に落胆する。力が入らない手足、ぼやける視界、マイナス思考の頭。どれもクレアを助け出す要にはならない。

「スレイディッシュ……お前は……無事に生きてるよな……」

涙を流しながらクレアと重なった自分の妹の名をリーフは呼んだ。

襲い来る大鎌の攻撃をキリアはギリギリのタイミングで回避していた。

絶妙のタイミングで二人のスレイディッシュの遠距離からの乱回転させた投げ鎌と懐で繰り出される多彩な鎌の動きがキリアに襲い掛かり、紙一重に避けたと言うのがほとんどだ。

防戦一方で反撃もままならないキリアが不利なのは一目瞭然だった。

突っ込んできたスレイディッシュの大鎌が右から左に旋回し、キリアに迫る。キリアは体重を後ろに傾けることで大きく後退、空を切った大鎌から激しい音が聞こえる。

体重を後ろに傾けたことによって体勢を立て直せなかったキリアはバク転の要領でさらにスレイディッシュから距離を開く。

だが、立ち上がりスレイデッシュを目視した時には遠くから鎌を投げてきていたスレイディッシュがすぐキリアの目前に迫っていた。

予想外の動きに対して右手の刀で鎌を押しとどめるが勢いを殺し

きれずにキリアの体は大きく後ろに吹っ飛ぶ。
（なんて腕力だ……！）
空中で体勢を戻し、足の裏を地面に擦り付ける。そこでやっと二人のスレイディッシュの姿をキリアは落ち着いて見ることが出来た。
「どうしたの？　お兄さん？」
「まさか、その程度じゃないでしょ？」
「もっと楽しませてよ」
言葉を交互に言うスレイディッシュの二人をキリアは見つめながら落ち着いて思案する。この状態、一体どんなタネがあって二人に分裂しているのか。どちらが本体が分かればなんとかなるかもしれない。それとこの能力を使うのに何かの条件があるはずだ。深く、じっくり思案する。
幸い、スレイディッシュがキリアを殺すことを目的としていない。それがこの時間を作ってくれている。
（あいつは……二人に分裂する前に何かをしたはずだ）
能力が発動するのにはそれなりの条件が必要になる。魔法ならば詠唱、剣技なら体勢（フォーム）、スレイディッシュのような特殊能力は能力に応じた行動や詠唱、高難易度になると天候や気温などという自然の力を借りるものもある。
必ず、この分裂が起こる前にスレイディッシュが仕掛けた何かがあったはずだ。
（戦闘が始まる時の魔法陣か……？）
確かにあの時、キリアと対峙したスレイディッシュは大鎌を地面に突き刺し魔法陣を広げていた。
（だが、あの時に魔法の発動は感じれなかった）
いくら気づかれないようにしようと間近で、ましてや戦闘中の魔法の発動をキリアが感じないはずはなかった。だが、実際にその魔法陣によってスレイディッシュが分裂――
（魔法陣は関係ないのか？）
そう。まだスレイディッシュが分裂したのは魔法陣のおかげと決

まったわけではないのだ。考えがまとまらないキリアに対して二人のスレイディッシュは大鎌を構え直した。
「それじゃあ」
「そろそろ」
「「いくよぉ！！」」
一人のスレイディッシュがキリアに走ってくる。またあの連撃がくるのはキリアにも予想できた。だが、このままたあの攻撃を受けて全て躱しきれるとは限らない。キリアは腰を深く落とし、刀を鞘の中に納める。
その行動にキリアに駆けてくるスレイディッシュと奥で鎌を投げようと構えていたスレイディッシュは目を見張った。その一瞬の体の硬直がキリアに十分な機会を与えた。
（魔力が吸い取られる中で剣技を使いたくなかったが背に腹は代えられん）
意識を刀に移し、体に残る魔力を刀に集約させる。
その間にもスレイディッシュは近づいてくる。目を伏せたまま意識を集中するキリアにスレイディッシュは目前まで迫り、大鎌を振りかざす。そこで、キリアは目を大きく開き目標の目の前の少女を見据えた。
「花月（かげつ）！！」
鞘から勢い良く刀を横薙に引き抜く。そのモーションに気づいたスレイディッシュは足を滑らしながらも後退する。刀の鋒はスレイディッシュには紙一重でかすらなかった。だが、その攻撃を避けたスレイディッシュの胴は大きく上下に切り裂かれていた。
「え……！？」
絶句しながら血を吹き出すスレイディッシュ。そのまま倒れこみ、その体は数秒すると地面に溶けるように黒く掻き消えていく。
こっちが、分身体！
目線を遠くにいるスレイディッシュに向けるとスレイディッシュは信じられないと言うような顔でキリアを見つめ返していた。

「すごいね……私を消した人間に会えたのは久しぶりだよ？　お兄さん、なかなかに強いね」
顔は驚愕しているが言葉には今ままで通り緊張感の欠片もない。
「それに、しっかりとした覚醒者みたいだし。すっごく楽しくなってきた」
そう言ってスレイディッシュはさくらんぼ色の小さな唇をペロっと小さく舐めた。すると、スレイディッシュのすぐ隣の地面から黒い塊が上に伸び始める。
「……なんだ！？」
その漆黒の塊はスレイディッシュの身長まで伸び、そして変形していく。人間の形に。そして形が整うと漆黒から色が変色し始めその色、姿形は……。
「なるほど……そういう事か……」
スレイディッシュそのものになっていた。
その分身の手にもしっかりと漆黒の大鎌が輝いている。
「そろそろ、私も全力で行こうかな？」
スレイディッシュがつぶやく。
本体を叩かない限り終わりはない。そうキリアは考えた。だからこそ、次の攻撃で終わらせよう。そう決めて刀を逆手に持ち、腰を低く構える。
（さっきとまた構えが違う……？）
スレイディッシュは首を小さく傾けた。刀を逆手に持つなんて事をすれば刀の構造上、刃に負担が掛かり肉を断ち切るどころか逆に刃が折れてしまいかねない。
さっきまで刀の使い方にしては型にはまらないキリアの攻撃だったがこの行動はスレイディッシュには予想外だった。
（あの前傾姿勢……かなりスピードに乗った一撃が来るわね……まぁ、どっちが切られても一人生き残ってたら私は死なないんだし）
クスっと小さく笑う。この魔力吸収状態で大技を二連続で出すのはかなりの負担になる。

キリアはこの一撃が入らなければ、魔力不足で身のこなしにも支障が出てスレイディッシュの攻撃を避けることがほぼ出来なくなる。逆にこの一撃が入ればスレイディッシュを戦闘不能に陥れれる。
お互い、瞬時に直感した。

――次の一手が勝負を決める――

と……。

三人は復讐の物語を創造していく。
生きる意味と存在の答えを求めながら、
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。

復讐という名の物語を創っていく。

To Be Continued

第三章　―7　戦闘終了

小さなぬくもり。
昔に失った唯一の家族と共に無くした物。そのぬくもりを今、リーフの腕の中で眠っている少女は与えてくれた。
あの時にリーフを抱きしめたぬくもりは紛れもなくリーフが求めていた物だった。
そしてその聖母のような笑顔を向けてくれた少女は今にも息絶えてつい最近までリーフが向かおうとしていた空の向こうに飛び立とうとしている。時機にこのぬくもりは冷えて冷たくなってしまう。
そのぬくもりのためにリーフは歩き、助け出そうとした。だが、その努力は虚しくリーフはその場に崩れ落ち、少女……クレアを抱きながら意識を落としていった。
街道の真ん中で一人の少女を抱きながら倒れ込んでいる少年の姿を見つけた二人の女は目を見開いた。
「大変！　誰か倒れてる！！」
「魔力が極限に減っている……かなり危ない」
「助けないと！！」
黒髪を腰まで伸ばし、赤色の布を頭に巻いた女が倒れ込む二人に駆け寄り腰に付けている剣を引き抜く。
そのまま早口で魔法の詠唱をはじめる。それに伴い女の持つ細身の剣が白く輝き始める。
その様子を視界に入れながらもう一人の金髪を側頭部から二つ伸ばす俗にツインテールと呼ばれる髪型を風に揺らしながら目線を大都市の中心に咲く真っ白い花に向ける。気配を感じるために碧眼の

瞳を閉じるとその花の下に六つの灯火。それが人間の気配だと察する。
瞳を開き感情の色素のない顔を少年少女に駆け寄った黒髪の女に向けた。
「高回復魔法（ヒーリング）！」
黒髪の女は剣を持ってない左手を仰向けにした少年の胸に置く。それと同時に左手から白色の光が溢れ出す。
「これで少しはマシになればいいけど……」
「……」
黒髪の女の言葉にツインテールの女は答えない。ただ、回復をされている少年の腕の中にいた少女を見る。
そして、ゆっくり口を開いた。
「そっちの少女の方が危険……最優先にしたほうがいい」
「ほんと！？　見た目的にはこっちなんだけど！」
「魔力の減少は少年の方が大きい。だけど、少女は魔力の所有量が少年と比べて圧倒的に少ない。かなり前から瀕死状態だと見られる……」
抑揚のない、機械がしゃべるようにツインテールの女は言う。その言葉に感情らしきものは含まれていない。
「ルナが言うならそうなんでしょうね。じゃあこの子を最優先にするわ」
左手を少年から少女の胸に移動させる。だが、黒髪の女が使っている魔法は肉体的な回復に過ぎない。魔力を供給しているわけではないので少女……クレアの容態が良くなるとは言えない。
だが、魔力がなくなることによって覚醒者だけでなく人間の機動力の源の心臓が止まるという肉体的な現状は免れることは出来る。応急処置とまではいかないが生命線をたぐり寄せる程度の事は可能だった。
「覚醒集団（アブノーマル）……」
ルナと呼ばれた女はもう一度碧眼を閉じ、憂いを帯びた声で小さ

くつぶやいた。

――次の一手が勝負を決める――

全身に駆け巡る緊張と失敗したらという恐怖心。額に浮かぶ汗がゆっくりと顎に向かって垂れた。

逆手に持つ刀。なぜキリアが今まで型のはまらない攻撃で敵を切り裂き、それでも尚刀を折らず居れたのか。それはキリアの実力云々ではなく、ただ単純にこの刀のおかげだった。

双竜。

それはこの世に存在する最強で最凶の刀の名称である。

この刀は魔法と科学の双方が結託し、実力者が集まり作り出された二本の刀。それはそれぞれ最強の切れ味を誇り最凶の能力を秘めた今では使われることとなくなった刀。

その二本の刀が振られれば大地を裂き、天を穿つと言われ伝説となり数百年前に行方がわからなくなっていた。

それがいつの間にか人の手に渡り、それぞれの力を発揮しその刀身を赤く染めてきた。

双竜には‘不知火（しらぬい）’と‘巴火（ともえび）’と名が付けられた。

‘不知火’は刀身だけでなく柄さえもが見えなく、それを手にしたもの以外はその刀身を見ることは叶わない。その刀は相手に軌道を読ませないのと共に長さや威力、形や強度を悟られないように作られた刀だ。

それを手にするものは‘不知火’にふさわしい実力を持つ人間でなければ‘不知火’はその持ち主を拒絶する。漆黒の炎を上げ持ち主を焦がすのだ。

まさに不知火という名が付けられたにふさわしい代物だった。
だが、もしそれを使いこなすほど‘不知火’を認めさせるほどの実力を持つ人間がそれを扱えば、それこそ最強の侍となる。
‘巴火’は如何なる攻撃、防御を行おうとも折れるどころか刃溢(はこぼ)れすらしない永久不滅の刀だった。
どのような刃物よりも鋭い刃を保つ‘巴火’は如何なる使い方で敵を切ろうと必ず敵を切り裂くことができる。もちろん、それ相応の実力は必要になるが‘不知火’のように持ち主を選んだりはしない。
‘不知火’とは逆に人間がこの‘巴火’を選ぶのだ。誰もが手にする事が出来る。だが、それはそんな安易な物ではないのだ。
持つものによってその‘巴火’は姿形、長さ、重さを変えるのだ。なぜそうなるかはこれを作り出した人間たちが誰しもがこれを持てないようにするためだった。
‘不知火’と同じ対処だが、まだ命が奪われないだけマシと言えるのだろうか？
自分が使うのに適した姿形、長さ、重さの三拍子が揃うことはほとんどありえない。逆に考えれば‘巴火’も‘不知火’のように持ち主を選んでいるのかもしれない。

そして、その双竜の片割れである‘巴火’。それこそが、キリアの持つ刀だった。
今まで無理な攻撃から身を守り、無理な体勢、形、軌道を描こうとも、また大きな剣技を使おうともこの一本の刀がもっているのはその‘巴火’の能力のおかげだったのだ。
キリアもだからこそ自分の流派でやり方で戦うことができた。
そしてキリアが今から放とうとしている剣技。それは元々忍者が使っていたとされるキリアが覚えている中で一番速い攻撃。
元々はクナイや‘巴火’のような日本刀ではなく脇差を使うのがおススメの剣技だが、‘巴火’にそれは関係ない。

――三段花月（みだんかげつ）――

それが技の名称。

これが、全てを左右する一撃となる。

キリアはスレイディッシュのどちらかがキリアに向かって駆け出すのを確認次第、発動する予定だった。三段花月（みだんかげつ）は平面に並んだ敵を切ることができない。絶対に前後に間が開かなくてはいけないのだ。

だが、その代わり三人を一気に切り裂くことができる。この技はスレイディッシュに一番有効と思えたのだ。

（どっちが本体でも二つとも切り裂けば問題ない）

そう考えていたからだった。

スレイディッシュも何か来ることは分かっている。また突進してくるであることも。だが、スレイディッシュは大きな油断をしていた。

その突進技が一人しか狙えないと思っていること。それがキリアの技を見破るのに欠けているところだった。もちろん、スレイディッシュがそれに気づける訳ではない。

勝率は五分五分。それはキリアの考えであってスレイディッシュには万が一の考えが無かった。

（じゃあ、そろそろいこっかな！　見せてみて？　お兄さん♪）

一人のスレイディッシュが駆け出した。その場に残るスレイディッシュはこっち側に突進してくるかもしれないと反撃（カウンター）の準備のために鎌を構える。

――いける！！――

瞬間。

キリアの足元にあった石が弾け飛ぶ。その弾け飛んだ様子を見た二人のスレイディッシュの瞳にはすでにキリアの姿は無かった。

（速っ！！　どっちにくるの？）
二人とも鎌を反撃（カウンター）のために身構える。
「三段花月（みだんかげつ）！！！」
瞬時に先に駆け出していたスレイディッシュの体がまっぷたつに切り裂かれる。それは一瞬の出来事で駆け出していたスレイディッシュは切られたことを知ることもないまま体が倒れていく。
（あっちを狙ったってわけね。残念ながら片方を殺しても私は死にません！）
にやっとスレイディッシュは口角を上げる。だが、すぐにその笑みは消え去る。
すでに自分の懐に入り逆手に持った刀の刀身が自分を切り裂く寸前であることをかろうじて視認したからだ。
「きゃぁぁ！！」
声を上げながら特殊覚醒者の経験蓄積でスレイディッシュの体が勝手に横に跳ぶ。だが、横に跳んだところでキリアの音速に迫る攻撃を避けきれるはずがなく――

バシュ！！

生々しい音を立てながらキリアの刀はスレイディッシュの脇腹を捉え、肉を引き裂き骨を砕き切った。その感覚がキリアの腕にも伝わる。
そのまま地面に足を擦りつけ減速する。そのまま体を抱え込むように項垂れる。体に激痛が走り意識が飛びそうになったからだ。魔力が体を正常に維持するのに必要な量を三段花月（みだんかげつ）で失った。体に浮遊感がまとわりつきめまいがする。
そんな状態で後ろを振り向くとそこには座り込み漆黒の大鎌を足元に落としたスレイディッシュがいた。その右脇腹には腹の中心まで抉りとるような傷が服の切り裂かれたところから見え夥（おびただ）しい鮮血がそこから溢れ出ている。

だが、キリアはそこで焦った。
倒せていなかったからだ。
確実に倒せていたはず。大きく切り裂く手応えもあった。だが、スレイディッシュは紙一重……いや一糸一毛重に即死を免れたのだ。
「痛いぃぃ！！　痛いよおぉぉぉ！！！」
スレイディッシュは大きな傷口を抑え、大きく叫び、泣き始める。まだ泣き叫ぶ体力が残っている事をその泣き声は表していた。
（くそ……仕留めきれなかった……だが、今ならクレイモアの情報を聞き出せるチャンスかもしれない！）
キリアはふらつく体で立ち上がり、ゆっくりスレイディッシュに近づく。近寄ってくるキリアの存在に気づいたスレイディッシュはキッと鋭い、だが涙で充血した目でキリアを睨み叫んだ。
「許さない！！！　私は痛いの嫌いなのに！！　許さない！！！許さないんだからぁぁぁぁぁ！！！」
その声に圧倒されキリアは立ち止まる。立ち止まると同時に激しい立ちくらみがキリアを襲う。ついその場に片膝付いてしまう。
スレイディッシュは左手で覆い隠せていないまだ鮮血が溢れ出ている傷口を抑えながら右手で大鎌を持ち立ち上がる。
「まだ……立ち上がれる力が……あるのか」
「許さない！！　ぶち殺してやるうぅぅ！！！」
スレイディッシュは傷口から左手を離し漆黒の大鎌の柄に移動させる。両手で掴んだ鎌を大きく右後ろに振り被る。それと同時に漆黒の大鎌から妖気のような藍色のどす黒い魔力が溢れ出す。数秒後、その妖気はスレイディッシュの周りをまとわりつくように激しく広がる。
その妖気が魔力だとキリアは気づいた。
（あれは……やばい……あんな高密度の魔力を練り出すなんて……）
キリアは今からくるだろう攻撃を避けるために立ち上がろうとするが、膝に力が入らない。
魔力の解放のために力んで傷口を開くのもお構い無しにスレイデ

イッシュは大きく今から放つ技の名前を言い放った。
「死の旋律地獄（イン・バイリンド・ビレッジ）！！！」
瞬間、急速に魔力が増大する。
スレイディッシュが立つ地面にヒビが入り始める。
（動けない……躱せないぞ！）
キリアの心臓が激しく波打つ。
（こんなところで死ぬのか……クレイモアに復讐もしないまま！）
手に持つ‘巴火’が微かに震える。
（動け！！　動け！！）
だが、魔力を失った覚醒者が動くことなど物理的に不可能で急速に魔力が回復するなどという奇跡も起きない。
歯ぎしりをしながらキリアは叫んだ。
「動けぇぇぇ！！」
「死ねえええぇぇ！！！」
その声がスレイディッシュの雄叫びに似た言葉と重なる。
……。
……。
だが、スレイディッシュの鎌から高密度に集まった魔力が解き放たれること無かった。なぜか？　そこには技を放とうと鎌を振るつもりだったスレイディッシュの右手首を白色のマントを着た男が掴んでいたからだ。
キリアは呆然とするしかなかった。
「やめろ！！　レイ！　今それを放ったらいくらお前の魔力でも魔華花弁（ピニオン）が吸い取ってしまう！　もう十分な魔力を吸収した。これ以上、ましてやお前の膨大な魔力を魔華花弁（ピニオン）が吸収したら構造が持たなくて拡散しちまう！！　今までの魔力もろともだ！」
「いやだぁ！！　離して！！　こいつを殺すの！！　ころすのぉぉ！」
「落ち着け！！　後からまた殺せばいいだろ！」
「いや！！！　今！　今殺すの！！」

「落ち着けって言ってるだろ！　しかもそんな怪我して何言ってやがる！　帰るぞ！」
「いや！！　離して！　レデント！！　私がリーダーなの！！」
「レイ！！」
白色のマントを着た男……レデントが殺す殺すと連呼して暴れるスレイディッシュの首を掴み、持ち上げる。
スレイディッシュは体が宙に浮き、大鎌を落とす。それに伴って妖気のような魔力も掻き消えるように消えた。バタバタと足を動かし「うぅ……」と苦しそうな声を上げる。
魔力が完全に消えたのを見たレデントは手を離し、スレイディッシュは地面に座り込む。
「う！　ごほごほ……」
「落ち着いたか？　とりあえず今は帰るぞ。後で幾らでも機会はある」
「……うん」
「よし」
レデントはスレイディッシュの頭に手を置いてブツブツと魔法の詠唱をした。
言い終わると背後の空間がゆがみ始め、上下に開き始めた。その中は真っ暗でなにがどうなっているいか分からない。
「お兄さん……私はレイ・クレイディア。あなたは？」
「……ぁ、俺はキリア・ヴァッシュベルンだ」
先に名前を名乗られて名前を聞かれたらつい癖でキリアは答えてしまう。でも、言ったからといってそこまで後悔しているわけではない。
「覚えてなさい……絶対に殺してやるから……」
憎しみの篭った、憎悪の目でキリアを睨んでからスレイディッシュとレデントは背後の空間の穴に飛び込んでいった。その穴の中に入り姿が見えなくなるとその穴はゆっくりと締まり、普通の空間へ戻る。

そして目の前に咲き誇っていた大きくいつの間にか神々しい輝きを放っていた魔華花弁（ピニオン）は花びらを散らしながら消えていく。
途端にキリアを襲っていた脱力感が消え、魔華花弁（ピニオン）の魔力吸収がなくなったことを悟ったキリアは動きにくい体で起き上がり刀をゆっくりと鞘に戻した。

結局、俺は何もできなかった……。
その悔しさがキリアの頭の中でただ響いた。

三人は復讐の物語を創造していく。
生きる意味と存在の答えを求めながら、
繋げられた因果を伝い、どこまでも続く闇に向かい……。
復讐という名の物語を創っていく。

To Be Continued

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6750m/

復讐という名の物語

2012年1月14日13時48分発行